

いまひとつの村が過疎で自然に帰ろうとしている。
豊かな自然環境の中で、生活をしていた村民の歴史を記録したものである。

大保木村の歴史

〈大保木村と石鎚山麓の歴史の資料〉

白石 史朗

目次

大保木村の由来	6
歴代の大保木村の村長	11
大保木村の村人のルーツ	15
兔之山の十亀家は	15
黒瀬の伊藤家は	16
千野の工藤家は	18
千野の坂東家は	19
西浦の伊藤家は	20
細野の曾我部家は	21
西之川の高須賀家は	21
東之川の工藤家は	21
大保木の名所・旧跡	22
嵯峨乃神社	22
東之川と西之川	23
東之川の観音さん	25
大保木村の大木と	27
京都東山・方広寺の大仏殿建立	27
大保木村々の医療機関と土地制度	32
大保木村の医療機関について	32
大保木村の製材所について	33

電灯について	33
コレラの大流行について	34
大保木村の銅山について	34
別子銅山と住友農林課の山林経営	38
白石家と小森鉷山との関係について	38
西之川の住友鉷山について	39
産業組合から農業共同組合へ	40
大保木村の金融機関	40
六ヶ村の物産について	41
民業について	41
大保木村の山の神と山岳信仰	41
信仰の始まり	41
山岳信仰について	43
神仏混合 <small>しんぶつこんごう</small> について	44
大保木村の氏神 <small>うじがみ</small>	55
石鎚山 <small>いしづちざん</small> の山岳信仰について	66
道路開設について	77
林道開設について	79
大保木村の食生活について	82
大保木村の歴史	84

大保木村の歴史



大保木村の由来

神野郡を改め新居郡にいぐんについて

大同4年9月2日、嵯峨天皇さかてんのうの御諱ぎよひを避けて、神野郡を新居郡にいぐんに改称した。元明天皇の和銅6年(713)に定められた「和名類聚」には、新居を仁比井「にひる」と註してある。新居は郷の名は「新居」から出たものである。新居郡内の郷名は新居、井上、鳩山、立花、加茂かもの五つである。伊曾乃神社いそのじんじや所在地であることから、神野という郡名が命名されたであろう。新居郡の東西南北は「東は関の立石より、以西なり。西は氷見ひみの境塚より、以東なり。南は別子銅山の船窪より、以北なり。北は高井神島より以南の海面を限るなり。」明治23年(1897)兎之山村とのやま、黒瀬村くろせ、前大保木村まえおおおふき、中奥山村なかおくさんそん、西之川村、東之川村を合併して大保木村が誕生した。昭和31年に大保木村は西条さいじょうに合併した。

大保木村の由来

明治21年4月明治政府は市制町村制を定め、翌年より施行する六ヶ村(兎之山村、黒瀬山村、大保木山村、中奥山村、西之川山村、東之川山村)を明治21年に合併して、大保木村が誕生した。その当時、大保木村と大保木山村の区別をするために大字おおあざを前大保木と表記した。

大保木村名称

上記の通り大保木はかなり新しい名称であるが、古くは大崖(オホキ)や大吹(オオフキ)と本川村史ほんかわむらの中に表記されている。大崖・・・大字中奥おおあざなかおくより南の方の山が険しさに価する村名を付けたと推測する。

大吹・・・意味がはっきりしないが、土佐の本川村で大吹という地

名が出てくる。横峰寺よこみねじから南方の地域（本川村）に掛けて、よく風が吹くから大吹くと云う村名を付けたと思う。

なお、大保木の村名の由来は新居郡誌の中に書かれている。大保木村は昔、西五ヶ村を表していたが、前大保木山村を中心に黒瀬山村、中奥山村、西之川、東之川を表していた。

石鎚山いしづちやまは数十万年前の火山が噴火して出来た山である。石土山が隆起して出来た山である。

石鎚山いしづちやまの前山、横峰寺よこみねじから大保木村あたりは、雨量も適当で木の成長は早く、豊臣秀吉の京都の方広寺の佛像の材や善通寺ぜんつうじの五重の塔の中心柱、三十三間堂の棟木を当地で伐採し出している。そして、大同元年に弘法大師のお手植えの杉も大きく成長していたが、40年前の伊勢湾台風で倒れ、数年前まで切り株や祠ほこりが残っていたが、現在は何も残っていない。その大木から推測すると水分も適当で、木を大きく成長させる肥沃な土地という意味で大保木という村名が付けられたと思う。

昭和三十年大保木中学卒業生数76名を資料として参考に分析すると一つの参考資料とし、地域毎に主な姓を挙げておく。

兎之山とこのやま（西条中学校に全員進学するので除く）

黒瀬くろせ（伊藤、丹、酒井）

大保木おおふき（伊藤、工藤、高橋）

中奥なかおく（伊藤、工藤、曾我部、十亀、藤原）

西之川（伊藤、藤原）

東之川（工藤、伊藤）

藤原鎌定を先祖と称する伊藤や工藤、藤原が66.7%で、次に丹や曾我部そがべ姓が続く。このデータは絶対では無いが長曾我部ちようそがべや秀吉の四国征伐に敗れて大保木に住み着いた関係の一つの資料にな

る。

黒瀬同郷会発足について

黒瀬ダム建設により黒瀬部落の大部分の139戸が水没した。そのため明治十八年に開校し、多い時には生徒数百名近くもいた黒瀬小学校が廃校になって早くも60年近くたち、分散移住した人達も、それぞれ定着し安定した生活をしておられ、黒瀬小学校の同窓会を開催したいと云う発企で昭和六十四年に第一回の総会を持ち、その後、同窓会が発展して大保木会になり、引き続き会が持たれ、平成十八年四月三十日(日)石鎚神社で伊藤富士男会長を始め、丹巡大保木公民館長のお世話により、第16回大保木会が開催出来まして有り難うございました。

明治四年の廃藩置県はいはんちけんから愛媛県の誕生までと大保木村の所属した県

明治四年(1871)七月 西条県

明治四年(1871)十一月 松山県(旧松山藩領及び温泉郡より

東宇摩郡まで)

明治五年(1872)三月 石鎚県(松山県改め)

明治六年(1873)二月 愛媛県(伊予の国全部)

明治九年(1876)八月 愛媛県(伊予の国と讃岐の国)

明治二十一年(1888)十二月 愛媛県(讃岐さぬきの国の分離、伊予

国のみ)

記念碑について

西条市との合併記念碑

(旧大保木役場上の県道の川側にある)

黒瀬出身日展評議員 伊藤五百亀 作

合併記念

明治二十二年末東之川山、西之川、中奥山、大吹き山、黒瀬山及び
 兎とのやま之山ノ旧六ヶ村ガ合併シ大保木村トナシ以来67ヶ年ノ歲月ヲ経
 テ昭和三十一年九月二十八日合併シ人口55, 116人ノ新西条ノ
 一部トナル

合併当時ノ現在747戸

村長 伊藤一

助役 伊藤政男

収入役 工藤熊太郎

村議会議長 丹清

同副議長 長曾我部ちようそがべ浜繁

同議員 酒井良太郎 十そがめ亀正春 酒井十吉 伊藤実福 伊藤坂美

伊藤富重 藤原忠男

工藤宮太郎 伊藤善四郎 工藤親光 伊藤行雄 藤原慶晴 伊藤増

美

資料は、氷見組大庄屋であつた高橋家に現存する、徳川時代の新居
 郡六ヶ山村改帳による (西条誌)

村名 年次	兎之山	黒瀬山	前大保木	中奥山	西之川	東之川	合計
	文化11	寛政9	寛政9	安永6	文化11	天明元	
	1814	1777	1777	1777	1814	1764	
庄屋	1	1	1	1	1	1	6
組頭	1	2	2	4	3	2	14
頭百姓	13	20	31	50	10	7	131
医師	1	1					2
社人			1	2			3
小百姓	8	74	90	115	43	24	354
家来		9	10	8	3		30
水呑	5	26	13	13	2	3	62
山伏	1			3			4
その他		4	1				5
総戸数	30	137	149	196	62	27	601
総人数	117	568	424	961	251	156	2477

なお、数字は総人数を除いて、他はすべて戸数である。そして、田野には医者墓がある。

庄屋について

兎之山村・十亀家 黒瀬山村・丹家 前大保木山村・高橋家
中奥山村・工藤家 曾我部家 西之川山村・高須賀家 東之川山村・伊藤家

六ヶ村の村名について

兎之山村は元は外野山村であった。その名は西条誌に書かれている。他の黒瀬山村、前大保木山村、中奥山村、西之川山村、東之川山村の五ヶ村名は、寛文四年（1664）十一月付の銀納請所願帳（工藤トモ氏蔵）に見えている。

大保木村（六力村）の庄屋

兎之山村 十亀家

黒瀬山村 丹家

前大保木山村 越智家→高橋家（後に氷見の大庄屋から養子を貰い高橋姓を名乗る）

中奥山村 工藤家、曾我部（泉）家→曾我部（中西）

西之川山村 高須賀家

東之川山村 伊東家

戸長制度について

この制度は、明治十三年～明治二十一年の大保木村が出来るまでの間実施した。戸長制度は始めは公選で、後は官選になった。戸長の任期は3年で再選は妨げない。議案の発言権を戸長に限定したうえ、議員の選挙についても地租を納付している者のみに選挙権及び

被選挙権が与えられるなど制約が追加され、戸長も官選になり、町村会の議長を務めるなど多くの権限が集中するようになり、行政に対する町村会の自主性は著しく制限された。

大保木村の戸長

兔之山村とのやま 十亀家（元庄屋）

黒瀬山村 丹家（元庄屋）

前大保木山村 伊藤家（元差配方・組頭）

中奥山村 工藤家（元組頭） 工藤家（和田家）（元組頭）

工藤金太郎氏が確認

（一時期中奥戸長役場の事務の記述の中に前大保木村戸役場の記述がある）

西之川山村 中奥山村の工藤家が兼務

東之川山村 伊東家（元庄屋）

大保木村の歴代村長

歴代の大保木村長について

初代村長

久門甚三郎 明治二十三年～明治三十三年 神戸村出身 戸籍と税務、兵事教育の事務の村政を軌道に乗せる努力をされた。

第二代村長

酒井蔵一郎 明治三十四年年～明治四十五年 黒瀬出身 特別税反別制を設け、財源に充て道路開設の計画を具体化した。その後、橘村の助役にも就任した。

第三代村長

岡本秀吉 大正二年～大正六年 氷見^{ひみ}出身 道路開設に伴う不祥事件で村会議員の殆どは新人となった。

第四代村長

松木亀太郎 大正六年～大正十年 飯岡村出身 林道が伸び大正八年檜原に村役場が移築された。極楽寺の階段参道も出来た。

第五代村長

伊藤一男 大正十年～昭和七年 大保木出身 林道の開設のため反別割を徴収して、終点西之川の太宮橋までの村道が伸び、道路の開設の必要に迫られ浦山線や平野線、東之川線が林道として造られた。現在の農協の前身の産業組合（信用購買販売利用組合）が出来、村内各所に鉾山が盛んに採掘された。

第六代村長

伊藤健一 昭和七年～昭和二十一年 大保木出身 小学校の三校主義の実現に尽力された。昭和十六年十二月八日に大東亜戦争がはじまり戦中戦後の苦しい時代を乗り切られた。

第七代村長

伊藤一 昭和二十二年～昭和三十一年 黒瀬出身 戦後地方自治法施行後、初めての公選により村長に選任された。戦後の混乱期から西條市との合併に至るまで、村政に尽力された。

大保木村議会議員

明治二十三年村制施行以来、昭和三十一年九月西条市に合併に至る間の村政に尽くされた村会議員

兔之山

十亀賢吉、十亀武三郎、十亀道雄、酒井十吉、工藤政義、伊藤直三郎、工藤勝一

黒瀬

丹亀太郎、伊藤美之太郎、伊藤猪之作、丹伝一、丹鹿助、伊藤宇平、伊藤清一郎、伊藤伊太郎、酒井良太郎、伊藤明輝、伊藤実福、丹武美、伊藤坂美、伊藤泉、丹清、酒井照雄、伊藤伝、酒井蔵一郎

浦山

伊藤五郎一、伊藤実太郎、伊藤光次郎、伊藤喜惣栄、伊藤福次、桑原保一

大保木

石壺喜作、伊藤善太郎、伊藤市太郎、山本与之衛、伊藤寛一、山藤栄助、十亀晋平、伊藤午太、伊藤文次、伊藤秀信、伊藤一、伊藤増美、伊藤董、伊藤善四郎、伊藤百才太郎、伊藤久市、伊藤音四郎、十亀正春

中奥

工藤徳太廊、工藤文治郎、工藤常吉、曾我部浜繁、工藤良平、伊藤幸蔵、伊藤作市、岡田啓史、工藤宮太廊、十亀槌三郎、伊藤栄信、坂東伊三郎、平野為次、藤原忠男、伊藤光明、伊藤行雄

細野

曾我部倉助、曾我部藤平、曾我部伊之作、曾我部安一、曾我部治男

今宮

伊藤金蔵、伊藤馨、藤原慶晴

西之川

伊藤隆太郎、藤原重清、高須賀相次、進藤正吉、工藤米八、伊藤富重、伊藤金良、高須賀稔、高須賀成次郎

東ノ川

曾我彦蔵、伊藤弥三蔵、伊藤重蔵、伊藤助作、工藤定吉、伊藤元作、寺川代吉、伊藤晴男、工藤親光

歴代の新居郡郡長

明治十二年（1879）に地方を区画して、府県の下に郡区町村を置き新居郡役所を西条町に置いた。同年三月一日より事務を開始した。そして、府県の下に置かれた郡は行政機構ぎょうせいきこうとして県令郡長を通じて、中央集権的な統制機構が強化され、明治十三年（1880）施行され、大正十二年（1923）郡制度が廃止となった。そして、現在は地名に郡名だけが残っている。

和田義 明治十一年十二月六日～明治十四年九月十二日

石原信文 明治十四年九月十三日～明治十八年十二月十四日

近藤縮往 明治十八年二月十五日～明治十九年八月二十五日

薬師寺篤好 明治十九年八月二十五日～明治二十七年七月二日

津田顕孝 明治二十七年七月二日～明治三十二年四月八日

天草種庚 明治三十二年四月二十一日～明治三十四年六月八日

浅野長道 明治三十四年六月六日～明治三十五年二月七日

相場陽 明治三十五年三月十九日～明治三十九年三月五日

田中滝三郎 明治三十九年三月五日～明治四十三年四月一日

近藤忠敏 明治四十三年四月一日～大正三年五月九日
植田延太郎 大正三年五月九日～大正五年三月六日
片野淑人 大正五年三月六日～大正九年十一月九日
林鉦吉 大正九年十二月九日
なお、中奥山村の土地の地検を石原信丈名で発行している。

大保木村の郡会議員数と議員数について

明治三十年四月に定められた郡会議員数は新居郡では町村から選出された者20名、大地主の互選による者6名の計26名になった。そして、明治三十二年の改正により、各町村を選挙区として、区毎に1名を選出することになり、定数22名となった。4年毎の改選で、大保木村の定数は1名であった。

大保木村の郡会議員名

明治三十年 十亀賢吉 (兎之山)
明治三十二年 十亀賢吉 (兎之山)
明治三十六年 十亀賢吉 (兎之山)
明治四十年 十亀賢吉 (兎之山)
明治四十四年 十亀武三郎 (兎之山)
大正四年 進藤正吉 (西之川)
大正八年 十亀武三郎 (兎之山)
なお、十亀賢吉氏は初代の神戸かんべ小学校の校長を務めた。保国寺の境内に十亀賢吉氏の碑がある。

村毎の主な村人のルーツ(現在も調査中である)

兎之山の十亀家は

長曾我部に追われて西条市の保国寺に助けを求めたら、兎之山は

天領地^{てんりょうち}で誰も住んでいないと言われたので、そこに、住み着いた。

大保木・黒瀬の伊藤家は

藤原鎌足公^{ふじわらかまたり}十一代の孫と称する。藤原朝臣為憲郷が伊豆押領使となり、伊豆の藤原として伊藤姓を名乗る。これが大保木や黒瀬の伊藤の初代である。三十三代目伊藤掃部祐範は祐重と改めて、天正の頃、土州から来て百合城に居を移した。百合城の多郎左衛門尉が天正十二年、百合城に奥の城を築き、飛騨守の弟、彦吉郎と共に居住した。翌天正十三年豊臣秀吉の四国征伐の時、多郎左衛門の長男久右衛門が、神霊を奉持して黒瀬山の森に来て森権現^{もりごんげん}を祀った。古記録は焼失したが、坂中には伊藤掃部の墓があり、百合城には第三代伊藤久右衛門の墓がある。天河寺の辺りに、寺川一族が居城したとの伝承は根強い。

(伊藤一著黒瀬峠、本川村史第二巻による)

黒瀬の伊藤家の家系について

昭和五十年八月発行の秋山英一著の黒瀬郷土史の黒瀬出身の伊藤伝氏の報告によると「藤原鎌足公^{ふじわらかまたり}十一代の孫、藤原朝臣為憲郷が伊豆国押領使となり、伊豆の藤原として伊藤姓を名乗る。これが黒瀬や大保木、中奥等の伊藤氏の初代である。

三十三代目伊藤掃部祐範は祐重と改めて、伊予国百合城(緩城)に居を移した。百合城の多郎左衛門尉が天正十二年(1585)百合城に奥の城を築き、飛騨守の弟、彦吉郎と共に住していたが神霊を奉持して、黒瀬山の森に来たり、そして森権現を祀った。代々伝えられた古記録は、宝暦二年(1752)の火災の為に焼失したとあり、それから浦山の坂中には伊藤掃部の墓があり、そして百合城には第一代や第二代の墓が田圃の上の土手にあり、第三代の墓は田圃のなかにある。(第一代目や第二代目、第三代目の墓は現地調査済み)

伊藤一氏が先祖から聞いた所によると、藤原の末孫である。紋所はイオリモッコで曾我兄弟と同じである。先祖が百合城から若宮さんを背負って来て森に居を構えた。

若宮さんは明治の始め、神社の統合の際に黒瀬の氏神さんになった。そのため、神社総代四人の内二人は伊藤総本家の関係者が当たり、一人は森から、もう一人は本家から出した。毎年旧2月4日には本家に招かれ、若宮さんのお祭りをし、ドジョウ汁や皮クジラの料理等の御馳走が出るのが習わしであった。

平成十三年度大保木会の参考資料

(一) 大保木の地名

大崖 (おおほき)

大吹 (おおふき) 意味は不明だが土佐の本川村で大吹と言う地名が出てくる。横峰寺から下谷あたりのことをいつている。大保木村は昔、西五ヶ村を意味し、前大保木山村を中心に、黒瀬山村中奥山村、西之川山村、東之川山村を表していた。

石鎚山の前山、横峰寺から大保木村あたりは、雨量も適当で木の成長は早く豊臣秀吉の京都の方広寺の仏像の材や善通寺の五重の塔の中心の柱、三十三間堂の棟木を当地で伐採して出している。そして、大同元年に弘法大師のお手植えの杉も大きく成長していたが、40年前の伊勢湾台風で倒れ、現在は切り株だけしか残っていない。このようなことから推測すると大保木村という村名が付けられたと思う。現在は切り株もなくなっている。

伊東久右衛門紀政墓

(百合城の下方の柵田の中にある墓碑より出来る限り正確に記録を読み取ったが、誤字もあるかと思う)

末年（承応一年1652）三月十六日寂

第三代伊東久右衛門紀政墓

行年九十三歳

忠院五山開大居士

之願相調院御付所之有白

記以其切今人ノ山一統不限多少

以助刀為未代遺其名豫此誌置者

維時天保第十四癸卯七月十六日

第拾代伊泰藏紀智葉新之造立

往者先亡伊東政之者本国温泉郡

之城主脇坂中將少忠郷君御

在国之時西條御領御預之石切御家臣

有由緒御山林御拝領其上ノ五銀納

なお、初代の墓は田圃の上の草むらの中にあり、墓石はない。第二代の墓は田圃の中にある。

大保木おおふきの伊忠原いしげんには、昔、土佐から逃げて来て当地に住み着き、権現ごんげんさんを伊藤シヨウイチ氏の先祖がお祭りして管理をしていた。そして、その権現ごんげんさんに石を敷いてお祭りして、（天河寺）権現ごんげん又は伊忠原権現と言っていた。

中奥字千野なかおくあざちの々の工藤家は

天智天皇土佐国朝倉てんちてんのうへ行幸ぎやうしやうのとき、お供九條右大臣範良郷が朝倉木の丸殿に泊まり、同殿を守護し、国司神主となり、代々子孫が相勤め十一代の孫従五位工藤山城守祐良の子工藤祐家が建久年（1190～1198）予州山中に大本大明神を山城国より勧請し

て住み着いた。久左衛門の子孫に系図がある。そして、中奥の七六
と言うところの林次が持てる系図と略図が同じでいたってその真を
みる。久左衛門屋敷に丹波守の墓がある。他に400年前から住み
着いた工藤家がある。

千野々の坂東家は

坂東の姓は、高知県の西部に多くあり、元々京都の公家であった。
そして、系図もある。それが土佐に赴任して、小さな城主になり、
長曾我部との戦いに敗れてその土佐の幡多郷カクミ山城主が山奥の
予州神野郷山中千野々に落ちて来た先祖は書いている。

詳しくは、長曾我部の家来と争いがあつて、その家来を殺して追わ
れ、慶長十八年(1613)中奥山村千野々に入った。中奥山に入っ
た中には、系統が違う坂東家がほかにある。

お地藏さんを背負つて土佐から戦いながら、千野々に持つて来て
祀つた。そのお地藏さんは京都の辻々にある地藏さんの一つではな
いかと思うと云っている。それを上佐まで連れて来て、お祀りして
いたのを、また、背負つて当地に落ちて来た。

そして、先祖は、土佐国長岡郡久保と云う所にお地藏さんを祀つた
が、その後氏子が離れ離れに成つたので、祈祷師に拜んで貰うと
地藏さんを捨てたりした者は家が滅びると云っていた、そして、坂
東家は本家であると云っている。

カタミヤさんと云う屋敷神をお祀りしてあるが、その神は大先祖を
お祀りしていると板東秀市氏は子供の頃に聞いていると云ってい
る。

戦績は系図の中にあるが、当地に来てから以降のことについては何
も記録はない。戦績の中にお地藏さんを背負つて赤揮あかふんどしをして戦いな
がら来たと書いてある。「その後、坂東家では、赤揮をしてはいけ
ない」と云う言い伝えがある。

明治の末期に、家が没落して貧乏していたので巻ものにすることが出来なかったが、その後、姉が戦績についての巻きものを土用干しをしていた時にバラバラに成ってしまった。それをまとめて巻きものにしなければ成らなかったが、当時の金で百円かけて系図の方だけを巻物に拵えた。

巻物の方は、現在もそのままにして置いてある。その巻物の中に牛頭天皇とスサノオノミコトを祀ったと云う経歴が書かれている箇所がある。

昭和十年に神社をまとめて合祀する時に、大元神社について書かれた資料の和紙がその時代の紙の質と異なり、偽物であると判断され、証拠にならないと県の神社庁から突き返された。その後、板東家に松山から県の担当者が来て、戦績等の根拠になる資料を持って帰った。それで、大元神社は、他の神社との合祀をせずに済んだ。その時に、手土産を持って神主さんと県の担当者がお礼に来た記憶があると話をしている。

天保の頃、曾祖父が跡取りのトモキチが道楽して、見込みがないので、追い出して、妹に後を取らせた。そこに、大洲藩指南者が殿の勘気を被って、弟子の二人を連れて江戸末期に今宮に逃げて来た。そして、坂東家の系図を土用干ししている娘を見て、仲良くなり、出来た子供が祖父である。父は明治十三年に生まれた。祖父は父が、十二、十三才になるまで家庭教師を付けていたが、父が二十才頃には、無一文になり、没落した。系図には、土佐藩多郷カクミ山城主板東ミツマサは故あって、伊州神野郷山中にいと書いてある。その神野郷は干野々に高野郷と云う地名があるので、そこではないかと板東秀市氏は話をしている。

中奥字西浦の伊藤家は、

天正年間（1573～1592）土佐国香我美郡郷岩界山の城主伊

藤大膳時重が天正十二年（1585）長曾我部元親との戦に敗れ、中奥に来て住む。八幡宮（現在の曾長河内神社）を勧請する。

中奥字細野の曾我部家は

曾我部三郎と云う者が土州から来て細野に住む。憚ることがあり、曾我部姓を隠し、細野三郎と名乗り、この地に留まり、畑を拓き、地名を細野とした。長曾我部の四国征伐後、黒瀬にも駐在していた。黒瀬飛驒守道信も豊臣秀吉の四国征伐の時には、野々市の原の戦いに出兵して戦死した。そして、細野の上曾我や中西の長曾我部も野々市で敗れて細野に逃げ、住み着いた。その後十亀も金子城に加勢していたが豊臣に敗れ細野に住み着いた。長曾我部の中には四国征伐に出兵し、引き続き豊臣秀吉の四国征伐に参加し、敗れ大保木山に逃げ込んで住み着いた者もいる。

今宮も秀吉の四国征伐の時に長曾我部泰元親の重臣伊藤八郎兵が藤原を連れて来て開拓する。屋敷跡や八旅館の跡がある。そして、城を造るように建てた。

西之川の高須賀家は

天正年中（1585年頃）秀吉の四国征伐の時、長曾我部元親の武將高須賀行重が神像を背負って当地に来て開拓した。そして、西之川の庄屋になった。詳しいは資料火災で焼失した。

東之川の工藤家は

庄屋勘蔵の先祖は伊藤次郎という士、百姓嘉蔵の先祖は土州大森の城主大森豊後守家老伊藤右京助儀春、百姓平兵衛の先祖は寺川日出之左衛門正近皆天正年間（1573～1592）土州から来る。火災にて記録文書なし、言い伝えのみである。

大保木の名所・旧跡

嵯峨乃神社

明治四十一年に中奥淀の溜の河内神社と合祀した嵯峨乃神社は、下記の事柄により、嵯峨天皇や日本最古の仏教説話集の転生について、関係があったと推測出来る。(白石史朗説による) 当時の石鎚山の山岳仏教に携わった高僧や地名等を挙げて後世に伝え、今後の課題とする。

① 橘姫たちばなひめが住んでいた処が橘姫あり、嵯峨乃神社や河内神社のあった場所の地名にも橘山中と云う記録がある。(次のページの嵯峨乃神社の略図を参照)

② 石鎚山の麓しんせいで修行した高僧灼仙や上仙の転生が書かれている「日本霊異記」「文徳実録」よって転生説が伝わっている。

③ 石鎚山の麓で修行し、天河寺の二世と云われた後天台宗の最澄さいていしゆの弟子になり、嵯峨天皇より寵命ちゆうめいを蒙り、乞食袋こじきふくろを賜ったことは有名である。

④ 昭和二十年前後に河内神社の西側に元東遥拝所があった所に、「嵯峨天皇を嵯峨乃神社に祀まつってあったという」内容が書かれてあった話を淀よどの工藤金太郎氏くどうきんたろうからお聞きしている。

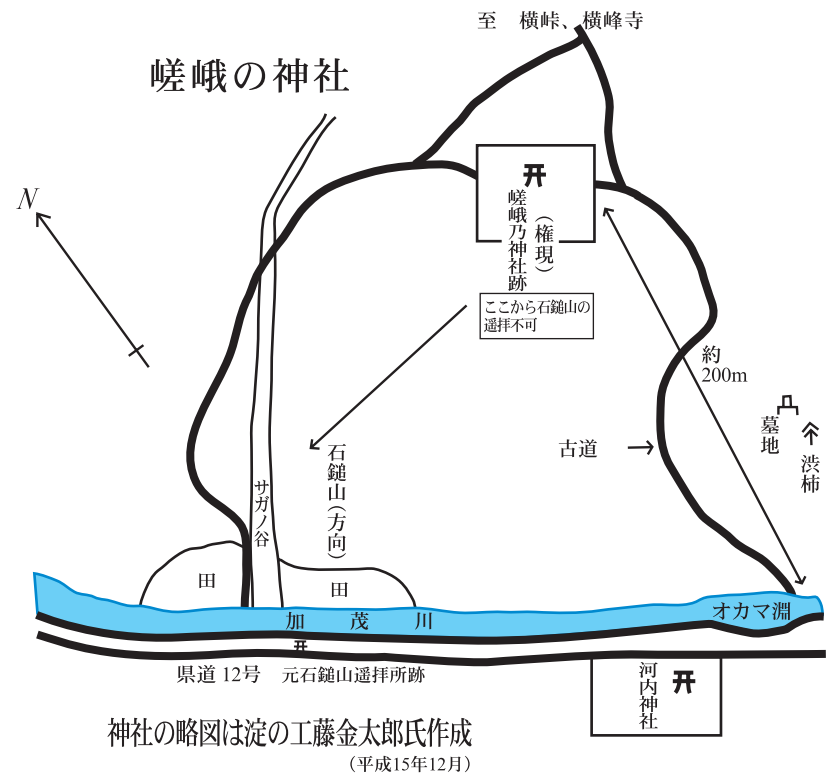
そして、伊予西条藩いよさいじょうはんの松平頼純公が巡検の途中に河内神社に立ち寄りお手植えの杉を植え、約二十年前に伐った。歴史的に見ると中奥の氏神は他の神社と比べると昔は格式が高く扱われていたし、神社や寺の建てた場所については根拠があると思う。

昔は菖蒲峠しよぶつげでも大根を作っていた、菖蒲峠は国の境を決めるために勝負した場所を意味する地名である。

伊藤家が東之川の庄屋であった。東之川の土居どい又は寄付よりつきに観音さんが現在もある。その上に庄屋の屋敷跡があった。天保頃には人口が多く、東之川に七十軒の家があり、工藤家や伊藤家が多く、他に

工藤家、伊藤家は源氏に追われて、土佐から瓶ヶ森かめがもりを通って逃げてきた平家の落入で、東之川に身を隠し、住み着いた。工藤ノブ工氏の會ばあさんの話によると前田峠まえだとうげ辺りで平家と源氏が戦った。前田峠には「ヒヨットデ」という地名がある。「ヒヨットデ」という地名は敵の源氏が飛び出して来る所で、注意を促すうながために平家が付けた地名であると言われている。最初は山の上の平地に住み着き、農作物を作りだんだんと下に降りて谷川の側そばの平地に住むようになっていった。

東之川山村と東之川



寺川家や曾我家が2〜3軒あった。中奥の淀よどや溜ための工藤家、大保木おほふきの工藤家は東之川の工藤家と同族であると言っている。

昭和二十六、二十七年頃になると少し国内も落ち着き、町への移住が始まり、三十軒になっていった。その後は過疎かそが進み、一時は一軒になった時があった。そして平成十年には二軒になっている。現在も休日には、山持ちの人は町から山に帰り、木の手入れを続けている。

そして、住友共電ちのの千野々発電所の給水所の水路番すいろばんが点検に来るか、郵便局員が平日に新聞や郵便物の配達にやって来る以外は、峻険しゅんけんな峰に囲まれた山間の閉寂な村である。その村にも、盆や祭りには町から帰ってきて、氏神うしがみを祭り、ご先祖のお墓に参り、供養をしているが、現在は盆や祭りに帰ってくる人も少なくなり、次第に子供の姿も見かけなくなっている。木は大きく成長して、村は完全に自然に帰っている。前田峠の下には、南急斜面に石を積み住み着いた屋敷の跡が点在している。その斜面のヒュウラという所に、お垂たるという滝がある。「お垂たる」は辞書で引くと溪谷が階段をなしていて、雨期には滝になる所、谷川の滝のある所「垂たる」の意と書いてある。そこは観光地のような人影はなく、静かな木立の自然の中に悠々と休むことなく、飛沫ひまつをあげながら山水を落とし続けている。手前の紅葉の間から滝の姿を覗かせているが滝壺たきつぼに降りれば、全体が見え立派な滝の姿が現われる。その滝壺には酒樽さかだるを作って水につけた所であると側の看板に書いてある。戦前、東之川の右手の山には、三菱系の瓶ヶ森かめがもり鉦山と左手の山にはヒノジ鉦山があり、最盛期（昭和初期）には映画館や店があった。夜は電燈でんとうがともり、現在の山スキー場の明りと同じようであったと土地の古老から聞いている。

掘り出した鉦石は東之川から前田を通って、千野々まで索道さくせうで下ろし、そこで荷馬車や自動車に積換え、一時期港まで運んだ。其の後索道さくせうを引き換え菖蒲峠しよぼを通り、加茂の下津池まで下ろし自動

車に積換え運んだ。戦後索道の施設小屋を使用して映画や漫才の興行を、昭和三十年頃まで時々やっていた。

住友共電は最初に小さな発電所を作り西之川、東之川、前田、千野々の順に配電して電力によって西之川と東之川とで水を集め、ずいどう隧道を掘り千野々の上から水を落して発電所を作った。

東の川の観音さん

落人は必ず元のうしがみ氏神の祭神をさいしん勧請してお祭りをしている。東之川の観音さんがある所に墓があり、その観音さんも昭和五十九年四月八日午後五時三十分頃に放火され全焼したがその後、観音さんを再建した。東之川の氏神高智八幡神社はけいちよう慶長十七年（1617）に大織冠鎌足公の後裔、工藤兵部之丞土佐国香我美郡山村黒森城主のとき其の第五子全苗集人範重が伊予国新居郡の山中の東之川に来て工藤家崇拜の祭神をさいしん勧請したその後藩公の信仰も厚く祈願代参、神殿建築等があった。明治四十一年に荒神社を八幡へごうし合祀し、高智八幡神社と改称した。お垂たるの上に祭っていたおいなり稻荷さん・金毘羅さん・天神てんじんさんも大正時代に高智八幡神社にごうし合祀した。現在もおいなり稻荷さん・金毘羅さん・天神さんの跡がお垂るの上にある。

ひしざ彦座というかめがもり瓶ヶ森しようぶとうけ鉾山の近くに小さなお墓がある。この彦座は九州の英彦山やくまのこんげん熊野権現と関係があるのでないかと思う。真まじしのみちの道教団は彦座を祭っている。彦座に登るには東之川からでは時間がかかりすぎるので、昭和三十三年十月十三日に前田峠の下に拝殿を建てその拝殿から真向いにある彦座を拜んでいる。毎年十一月十三日に西之川の大宮神社にお参りして、そして東之川の拝殿にお米、御神酒、お塩をお供えしてお祭りをしている。

工藤ノブエ氏の話によると、お垂るの上の天辺と家の近くに3箇所に小石を積み上げて若宮さんをお祭りしてある。また藤原ユミ氏の話でも今宮にも3箇所に若宮さんをお祭りしてあるそうだ。東之

川と今宮の若宮さんは関係があると思う。今後の研究の課題である。明治に東之川の一番良い場所の「ナルマ」に小学校が出来た。工藤ノブエ氏の話によると昭和初期に谷口夫婦が先生で赴任され、非常に熱心に勉強を教えてくれたと言っている。昭和二年に西之川と東之川の間林道が完成したので、大保木村の方針である統廃合が、昭和十一、十二年頃に実施され、大宮神社の横に両小学校が統合して高宮小学校が最初に建てられその校舎が完成するまで、一時西之川小学校の高学年生は東之川小学校に通学して学んだ。多い時には各学年1クラスが6学級ありクラスの人数は約三十名であった。

昭和九年頃東之川から大保木の高等科に進学を始めた。東之川から山道を通り前田峠を越え、千野々に出て高等科に行くのが時間も短く便利であったが、雨の時には細い山道が悪く、通うのが大変で辛く西之川に行けば友達も多く、朝五時に起きて林道や県道を通って、河口を回り千野々の仙徳寺に出てそこから新道を上り、片道二時間以上掛かって通学をした。そのために早朝や夜は懐中電燈で道を照らしながら、雨や台風、雪の時も通い続けた。当時虚弱であった工藤ノブエ氏は体調の悪い時には、細野の親戚に泊めてもらったり病気の時には欠席したりしながら、二年間高等科に通い続けた。そして時々下谷から住友鉱山の鉱石運搬用のトラックに便乗させてもらったそうである。このような状態だったので通学が精一杯で運動になったが、あまり勉強にはならなかったと話していた。一才年下の妹さんは頑張って、皆勤で二年間通学したので卒業時に渡部先生が新聞社に記事として取り上げてもらった。

西之川から東之川までの林道も拡張され昭和三十年〜四十年の十年間、瀬戸内バスが東之川まで乗り入れることになり、夜は東之川に泊まって翌朝一番に出て中学生を千野々の大保木中学校まで乗せて走た。産業は林道が付くまでは朝2時に起きて三極やこうぞうの

樹皮、番茶を前田峠を越え千野々に下り、極楽寺、里山、七曲り、黒瀬峠、長谷の旧道を通り氷見に負い出し、買物をして帰った。昔三椏や番茶のシーズンになると一家総出で、夜もあまり寝ず、夜どうし作業をした。現地にいると太陽が当たらず茶の木も大きく成長出来ず、杉林の木立の中に小さくなって点在している。そこには番茶の産地の名残がある。東之川の中央には寺川人吉氏の立派な碑がある。氏は長年村会議長を勤め、村民のために尽くされた功績を讃え、村民が碑を建立した。そして碑に書かれた字は久松知事の直書である。また昔は、土佐の寺川地区の生活圏は愛媛県新居郡にあつたと思う。高知市内に出るのにも高山が多く、より不便であつた。町から黒瀬峠を通り千野々、前田、東之川を経て山越えをして寺川に行き、生活必需品の行商で生計を立てていた人もいた。

西条市には寺川出身の方もおられる。現在本川村には高知市からバスが入っているが西条市からは距離的には近いがバス路線がない。東之川と土佐の寺川とは平家の落人との深い関係があつた地域だと思う。

大保木村の大木と京都東山の方広寺の大仏殿建立から学んだこと

歴史の調査研究の動機と目的

村が過疎化や核家族化で故郷の歴史が伝わらないので、村の良さについて伝えて置きたい。現在、テレビと核家族化、パソコン等で、孫や子供から年寄りに逆転している。親と子、孫の共通の趣味を持つことが大切、親には権威があるか、対等に勝負が出来る囲碁や将棋、スポーツ等の中から選択すべきである。

子供や孫に伝えるべき歴史や伝承

○ご先祖の生きざまや苦勞、努力の跡を伝える。(歴史教育)
食料事情、教育(学校)、医療機関、産業、交通事情、道路
村人は応仁おうにんの乱で山城から土佐に逃れ、その後長曾我部元親ちようそがべもとちかに追われ四国山脈越え石鎚山の麓ふもとに住み着き、更に秀吉の四国征伐のときに大保木城や百合城の落武者や落人として住みついた。

大保木村の大木と京都東山の方広寺の関係

方広寺の大仏殿の仏像の巨木は大保木山村から伐きり出された。

○何故、秀吉の方向寺建立か

①秀吉の幕藩体制の基礎固めを図る

秀吉が関白や太政大臣たじようだいじんに任じられ、豊臣姓を賜り、豊臣家の威光にかけて、意識して東大寺の仏像の座像より高さが4メートル高い大きな方広寺を天正十四年(1586)京都東山に建立を始め、三年後に完成した

②国家安康・君臣豊楽の祈願

方広寺に大きな釣り鐘を造り、幕藩権力と礼会の安寧あんねいを保ち、安定した生産と生活が出来るように農民として、年貢や諸役に努めるよう祈願した。

③刀狩りと兵農分離

国家安康を計るために、農民が武器刀を持つことを禁じて、領主が刀を没収し、良いものは鋤すきや釘くぎとして方広寺の建立に使った。

○方広寺の建立にあたって、豊臣秀吉は全国の諸大名に良材の供出を指示した。

指示した大名・・・高知県、和歌山県(熊野くまの)、長野県(木曾きそ)、富士山、宮崎県、愛媛県(石鎚山付近)の諸大名に指示した。

○方広寺の建立に係わった人物

豊臣秀吉・・・織田信長に仕え、数々の手柄を立て、重用され、羽柴氏を名乗り、近江長浜城主となり、中国征伐の任を負い、備中高松を包囲中に明智光秀による信長の暗殺「本能寺の変」が起こり、その後、山崎合戦で光秀を破り、大阪城を築城し、四国の長曾我部、九州の島津、北条、奥羽を平定し、天下統一を達成させた。方広寺建立。

福島政則・・・秀吉の伯母の子（秀吉の従兄弟）、方広寺の普請奉行として現在東予市の徳蔵寺で大仏殿の巨木の伐り出しの陣頭指揮に当たった。後に国府城（今治東唐子山の中腹で瀬戸内海が良く見える所）を築いた。その六十九年後に尾張の清洲城に移る。

豊臣秀頼・・・文禄二年（元和元年（1593）～1615）安土桃山時代の武将。秀吉の次男。母淀殿（浅井家）の幼名は捨丸。秀吉の養子秀次の処分後も秀頼の将来を案じ、再三、大名からも血判の誓書をとって秀頼に対して異心なきことを誓わせたが、関が原の戦い後、摂津、河内、和泉の六十万石の一大名に転落。慶長八年（1603）徳川秀忠の娘と結婚した。元和元年（1615）の大阪の陣で、再度徳川軍に攻められ、ついに母と共に自害し、豊臣家は滅びた。

田中内蔵・・・金庫番。秀頼の家臣。石鎚大権現の修築や前大保木山村にあった仙徳寺の仏像の修繕を担当。

○方広寺の大仏殿に使った巨木の伐り出した場所の確認調査の手順について

①石鎚山の前山の記録により、絞って旧前大保木山村と千足山村の西部（横峯寺付近）について古くから聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の対象のお寺は・・・横峯寺、仙徳寺、観音堂の境内に絞って聞き取り調査を実施した。その結果、次の通りで、古老の

話の中身から糸目が少し判明した。

横峯寺・・・大保木山に詳しい伊藤氏と横峯寺職員の伊東氏の二人の指導で聞き取り調査を実施した。その結果、弘法大師のお手上の杉と善通寺の五重塔の真柱や三十三間堂の棟材を伐り出しが、方広寺の大仏の巨木については何も判明せず。なお、調査中に判明した横峯寺の境内の大木について、此処で詳しく述べておく。

弘法大師のお手植の杉

弘法大師（空海）が中国留学から帰国した大同元年（806）横峰寺の境内に、大師のお手植えの杉があったが、約四十年前の伊勢湾台風でその大木は倒れ、伐採した。当時（四十年前）には大人9人が抱える程の大木であった。その大杉を元横峰寺の職員伊東氏の話から推定すると木の周りは約14・4m、木の直系約4・6m（大人の両手を開いた長さを1・6mと考えて算出）
なお、弘法大師が星ヶ森で星占いをした場所がある。

善通寺の五重塔の真柱として搬出

元職員の伊東氏の話では、善通寺の五重塔の真柱を伐り出している。その後善通寺の仏務室でお聞きすると、資料は残っていないが横峯寺から伐り出されたという返事であった。山から運び出した道は方広寺の時と同ルートであったと話していた。

京都三十三間堂の棟木として搬出

京都三十三間堂は方広寺の近くにあり、一方の寺が参考にして同じ道を通って運びだしたと思う。

仙徳寺・・・天台宗のお寺で現在は廃寺である。寺の趣意書の中に秀頼公が石鉋登山の時に、その寺の大仏殿だいぶつでんの用材を伐り出した跡を見て廻り、本尊の破損箇所の大修繕の記録がある。その記録を参考

に聞き取り調査の結果、ご先祖が明治初期に戸長を務めたご子息の工藤金太郎氏から「大保木村字横吹に住んでおられた故伊藤政市氏が横峠の大杉を方広寺の大仏殿の用材として、伐り出したという話を聞いたことがある」と連絡を受けた。

その内容は「故伊藤政市氏が横峠の土地を借りて、昭和三十年頃に紙の原料として三極みつまたや楮こうぞうの栽培をしに行く途中に大木の採り株きで、一休みをした、その採り株はムシロ何枚敷きもあった」とお聞きしている。その手がかりを見つけるまでに約五〜六年係かかった。

その後、お孫さんの伊藤章夫氏宅を訪ねて祖父からお聞きしたことについて現地調査を実施し採り株を発見すれば、専門家に分析を依頼する予定である。

②方広寺の大仏殿の巨木の搬出じようじゆうと常住じようじゆうの神殿修築と仙徳寺の修繕について

☆巨木を採り出す代償として神願し修築した

☆人夫を叱咤激励すれども巨木は動かず、石鎚大権現に願を掛け霊廟造営の願文を神前に捧げて平地に下ろした。

☆天正十四年（1586）方広寺大仏殿の地鎮が始まり天正十七年（1589）秀吉が創建した。

☆方広寺創建後大凡二十年（慶長十五年（1610））後、秀頼によって常住の霊廟造営がなされた。

神殿、拜殿、末社、本地堂塔、仁王門、烏居、その他僧坊等至るまで修築された。

なお、石鉄山別当寺神前寺は明治二十二年に火災で焼失、焼け残りの一部らしい物が現存している。

③大保木村の地名と大木について

大保木村の峰から横峯寺の上にある星ガ森（星占い、鉄の烏居）には大木があった。また、横峯寺と天河寺の大杉の木の影が朝日と

夕日によってお互いに影を写しあっていたと聞いている。愛媛県新居郡誌によると「大保木村の村名は、旧大保木山村即ち、前大保木村より出づ、そして大保木村の由来に詳しくからざるも山村にして霊木の森林鬱茂せる保育せしむの意より名称せしものならむかと傳う」と記録あり。

それ故に、六ヶ村が明治二十三年に合併したが大保木村という名が付いたと思う。

昭和三十一年に西条市と合併し、現在では西条市大保木になっている。

大保木村の医療機関と土地所有制度

大保木村の医療機関について

明治以前から黒瀬や前大保木、細野ほそのには医者いしゃがいた。細野には医者いしゃの墓があり、その墓にお参りすれば、病気が治ると云う伝承を叔母こえだの小枝こえだに聞いたことがある。

西之川銅山を住友が発掘していた時代には、西之川に住友病院があった。そして、大保木の極楽寺ごくらくじの下に医者や助産婦さんがいて開業をしていた。その後、昭和十年二月一日に病院が大保木から千野々に移設され、県立大保木診療所となった。

西条市に合併後は、西条市立大保木診療所として小松町と共同運営をした。

次に、その診療所の担当者名を挙げておく

医師名 助産婦名

昭和十年～昭和二十二年 三浦医師 藤井アイ助産婦

昭和二十二年～片山医師（女医） 藤井アイ助産婦

昭和二十三年九月～星加医師 藤井アイ助産婦

昭和二十三年九月～浦部医師 藤井アイ助産婦

昭和四十四年七月、星加医師 藤井アイ助産婦

前大保木村にあった時の医師は伊藤亀三朗

昭和二十年初め頃、元郵便局長曾我部伊之作筋・背違い等の施持（無資格）

昭和二十年代の頃、曾我部今吉の妻曾我部イト（無資格の産婆）

なお、戦中、戦後の医者が不在の時期には助産婦藤井アイ氏が診療所に常駐して、赤児を取り上げるだけでなしに村民の健康管理に務められた。

大保木村の製材所について

県道が開通した昭和の始め頃までには加茂川にも現在と違って水量があつたが、雨が降れば、水量も増し人夫を約14人集めて、木材を一本ずつ流して黒瀬の大畑や釜の口の製材所迄流し製品にして馬車や自動車で運んだ。

途中で雨が止めば水量も下がり、次の雨が降り水位が上がるのを待った。

電灯について

西之川に小型の水力発電機を取り付け、そして、その電力を西之川から東之川、前田を通して干野々まで下ろして、その電力を用いて西之川から東之川、寺床の上の山の中腹の貯水池までの隧道を造り、そして、高田屋商店の前に鉄線を張り渡し、吊り橋を架けてあつたが発電所を造る為に鉄橋に架け替えて、トラックに重量のある機械を乗せて運び、発電機を設置し、昭和3年に住友共電が大保木発電所を造った。

そして、水を通して池に水を溜め、落下させて発電し、大保木村には昭和四年に電灯がついた。なお、成就じゆうじゆには西之川水力発電所の発電によって、大保木村よりも早く昭和二年に電灯がついた。

当時（大正初期頃）高田屋商店の袂たもとにある榎えのきの大木にワイヤロープを掛け、支柱にした跡が今も鮮明に残っている。この吊り橋の絵が現在残っている。この吊り橋は中奥字西浦の曾我部太郎右エ門が中心になり吊り橋を架けることに尽力されたと藤原忠男氏から聞いている。

中奥大字長会議録によれば、明治四十三年九月十一日に千野々の架橋費賦課予算額を出し、明治四十五年一月二十六日に費用を割り当てた記録が残っている。

平成十四年一月十七日の県近代文化遺産委託主任調査委員 岡崎直司氏が「鉄骨製の橋は残存例がなく、近代文化遺産として貴重である」ことを記事として愛媛新聞に掲載されている。

コレラの大流行について

西条地区には安政年間（1858～1859）コレラが大流行したが、少し遅れて、明治五年～六年にコレラが大流行して大保木村に猛威を奮った。全国的には明治十一年～十二年にコレラが蔓延した。明治の中頃から防疫のために、隔離病舎の設置と清掃励行など県の方針として強化した。明治三十年四月伝染病予防法が公布され、各長村に隔離病舎が設けられた。中奥については、現在の大保木公民館の下に隔離病舎がかなり遅くまで残っていた。そして、古老の話では坪石つぼいしにも隔離病舎があったと聞いている。

明治四十三年の中奥隔離病舎建設委員には曾我部太郎右エ門と伊藤石蔵が選ばれている。（中奥大字長会議録による）

なお、坪石の隔離病舎がとり壊されて大保木公民館の下の場所に転築された。

大保木村の銅山について

明治時代から昭和二十年頃迄、西之川には銅山があり、明治

三十一年頃には精鍊せいれんするため、曾祖父白石豊蔵そうそふ じよぞうや祖父力作そふりきさくが薪や木炭を溶鉱炉の燃料として供給したが現在でも「トロッコ」の跡が残っている。

伊東鶴一著「山家の思い出」によると、石鎚山は千足村の共有の原始林であったのを、住友鉱山が精鍊用に千足村から買い受け、木炭や薪にして鉱石を精鍊した。

その基石大の「鉱かす」が千野々辺り迄流れていた。それを金糞と呼んだ。また、木炭を運ぶのに御山様の中腹に横一文字に「ウイガナル」迄「トロッコ」の「レール」を引いて、そこから成就山の南側迄、索道で巻き上げて西之川鉱山に運んだ。成就じゆうじゆの「ゼンジ」山から一寸行ちよつとった所に谷があり、その谷は人口の谷で橋が架かっていた。そして大正七年には、その橋の下には索道が残っていた。

叔父の白石重吉の話によれば、明治二十八年～二十九年頃に成就社のツナンナルで曾祖父白石豊蔵や祖父力作が住友農林課の山仕事を請け負って、炭を焼き、薪を作り、西之川の住友野地鉱山（夜明け峠の下）の燃料として提供した。

当時、お山市やまいちに客が多く、成就で泊まり切れなかったので炭小屋に泊めたのが常住屋じやうじゆうや白石旅館の始まりであると聞いている。

明治三十二年八月二十八日に西之川が暴風雨で山崩れに遭い、野地鉱山の炭焼き小屋も埋没で、鉱山への燃料の供給も出来なくなり、廃業せざるを得なかった。

鉱山の開発の初期には、現地で精鍊し、粗銅そどう（レンガ形）を背負って氷見の港迄運び出した。仙徳寺の横から極楽寺間での新道は住友農林課が粗銅を運ぶために作った道であると聞いている。その後、鉱石を千野々まで運び、駄馬で氷見に運び出した。東之川鉱山も相次いで開発され、東之川の瓶ヶ森鉱山から千野々まで索道が仮設され、ここから新兵衛港まで運び出したが同様に、龍王鉱山からも鉱石を運搬した。その後、索道を取り除いた。そして、龍王鉱山の住

宅の跡が森林公園の中に残っている。又、コンクリートの橋下駄の一部が加茂川の中に残っている。そして、この所の上に大保木城と云われた跡がある。

西之川や瓶ヶ森の鉱山に従業員が集まり、住友病院が出来き、千野々や中奥からも前田峠を越え買い物や仕事に行つたと聞いている。

後に、西之川や東之川、龍王山鉱山も菖蒲峠を越え、下津池に下ろしトラックで運んだ。大保木の鉱山の何れも硫化銅鉱で品質が悪いので政府の奨励金が出なくなると中止する状態で第二次世界大戦後は全部廃坑になった。

大保木村地区には、西之川や亀ヶ森、龍王、恵等の銅山が沢山あった。

西之川鉱山

明治年間に開発され、盛時には選鉱製錬設備を有して、精鉱月3、000トン。昭和三十年代に閉山

亀ガ森・龍王鉱山

亀ガ森坑は瓶ガ森山の北斜面（標高1、100mに、龍王坑は4km手前に北方の千野々口があり、両者は併合して操業された。

大正年間の盛時には、合わせて年7、000トン（銅1・8%）を出鉱、その後昭和十五年頃は亀ガ森坑より年4、000トン（銅1・2%）、龍王坑より800トン（銅1・4%）程度であった。戦後何れも閉山。

参考に住友別子鉱山史（上巻）の中から西之川鉱業所に関する内容について掲げて置く。

明治二十年代初頭、住友は景気の変動を上手に乗り切つて経営を回復したが、起業熱の高まりもあって、別子支山の確保に全力を尽

くす事になった。まず、明治二十年（1887）5月3日高知県土佐郡朝谷村（現・大川村）の朝谷銅山と大北川村（現・大川村）の中久保銅山を買収して、9月24日付で樅之木（モミノキ）坑業場（鉱業所）とした。次いで、翌二十一年二月には同県同郡桑瀬村（現・本川村）の黒滝銅山を、明治二十二年に愛媛県新居郡大保木村字西之川（現・西条市）の野地・中之郷銅山を買収して、10月16日付弟地（オトヂ）鉱業所を合わせて三ヶ所になったのである。

そして、事務分課は、開坑課・製鉱課・会計課・土木課・販売課・製炭課・筏津（イカダツ）・高藪^{たかやぶ}・川来須（カワクルス）・桑瀬^{くわせ}（各分課）・庶務課・新居浜分店・山根精錬所・弟地鉱業所・樅之木鉱業所・西之川鉱業所の以上七各課一分店。一精錬所・三鉱業所に発展し、醸造課・山林課・立川分店・落合製炭課・七番製炭課が他の課に合併もしくは廃止された。

西之川鉱業支所の製炭係と会計係を廃止して①採鉱係、②溶鉱係^{ようこう}を置いた。以上の組織改正は別子鉱業所の新居浜移転にともなう合理化策であった。

別子銅山について

別子銅山を開いた住友（泉屋）は元禄十五年（1702）別子銅山（新居浜浦を結ぶ泉屋道が許可されると海岸に宿屋を設置して物資流通の拠点にした）。

口屋で粗銅を集め、船積みして大坂に送り出した。米をはじめ生活物資は口屋に集め登り道を通じて別子に輸送された。

西條誌によると天保十三年（1842）頃の別子銅山の事について記載されている。明治二十二年（1889）に口屋を約2km西の惣開に移転した。

（愛媛県の歴史散歩 県立高等学校教育研究会社会部会 山川出版による）

別子銅山と住友農林課の山林経営

四国の経営山林は元禄四年（1690）別子銅山開坑と同時に鉱山備林として銅山に必要な坑木、薪炭材供給のために、時の幕府より、付近の山林を貸与されたのに始まる。

幕府から借用していた山林は、明治維新によって、大部分国有林に編入されたが、購入により立ち木は一切会社所有となり、土地は植樹敷として明治十六年以降向う六十ケ年間貸与を受ける事になった。

その期限は昭和十七年であったが会社の誠実な継続陳情により更に十ケ年延期された。しかしながら戦後、国有財産を民間に貸付することは国有財産法に抵触するとの見解から、昭和二十八年より五十年間に返地することに契約が更新された。

しかしながら別子山林を毎年約50分の1ずつ返地していくことは、実際運営上相互に支障と不利が多いばかりでなく、別子地区山林経営に二百数十年の歴史と山林の現状に鑑み同地区は将来とも住友において経営するのが最も適切であるとの見地から所管農林省と協議が整って、石鎚事業区の一部と別子地区山林とを交換することとなり昭和三十二年二月に実施された。

ツナン平の山林は鉱業用地、あるいは銅山備林として、明治維新前より所有していたものであるが大部分は明治十五年以降に買収した山林である。現在のツナン平は営林署の所管である。

（住友林業、経営山林の概要 昭和三十三年二月二十日発行による）

白石家と小森鉱山との関係について

松木住職は極楽寺の三代目で現在の神野住職はその弟子であり従兄弟であった。豊蔵は読み書き、算術が出来たので住友農林課の帳面付けをした。また明治十年に大保木小学校が出来るまでは極楽寺

で読み書き、算術を教えていた。その時に極楽寺の松木住職の長女イセと恋愛の仲になり結婚した。

イセは読み書きの出来る学識のあった賢い人であった。イセが亡くなったから大正十四年頃に、力作はイセの兄を約一年間、中奥に離れを建て面倒を見た。伯母のマチヨも食事を運んだことがあったと聞いている。

松木家は氷見の切川の大金持ちで子孫は関谷や九州に移り住んでいる。関谷に移り住んだ者の中には、県立の水産高校の教員になった者や裁判官になって九州に移り住んだ者もいる。力作も豊蔵やイセから習い学識があった。住友農林課の帳面付けをしながら成就社の下のツナン平で豊蔵と力作は炭焼きをしたり、住友農林課の山仕事の下請けをしたりしていた。力作が十八歳か十九歳の時の明治二十八年～二十九年頃にお山市の時に信者が多くて成就に泊まれないので、炭焼き小屋に泊めたのが白石常住屋旅館の始まりである。その当時、ツナン平で力作と豊蔵が薪や炭を西之川の小森住友鉱山に供給していた。ツナン平の炭焼き小屋から小森鉱山迄運んだトロッコの跡があった。小森鉱山には溶鉱炉もあり、鉱石を熱して溶かす燃料に薪や炭を使った。

精錬された銅は県道が出来るまでは旧道を背負って西之川から氷見の港まで長持ちをした。溶鉱炉のあった所は現在も禿げ山である。そして、仙徳寺から極楽寺間は住友鉱山が道を作り、現在も新道と呼んでいる。

力作の話では高峠城の下にあったお墓を背負って西条市洲之内の明智院と云うお堂の横の墓地に降ろした。その時に力作はそのお堂に当時の五円を寄付した。

西之川の住友鉱山について

旧千足村郷出身の伊東鶴一氏が古老に聞いた話では、石鎚山には

千足村の共有する原始林があったのを、住友が西之川の鉾山を発掘してその精錬用にと千足から買い取り、そして、木炭にして鉾石を精錬にした。その碁石大の「鉾滓」が千野々辺り迄流れていた。それを金糞と呼んだ。また、木炭を運ぶのに御山の中腹に横一文字に「ウイガナル」迄「トロッコ」の「レール」を引いてあった。そこから成就山の南側迄索道で巻き上げて西之川鉾山に運んだ「ゼンジ」山から一寸行った処に橋があった。あの谷は人工の谷で大正七年に伊東鶴一氏が友達と登山した時には橋の下に索道が残っていた。
（山の家の思いで伊東鶴一著よる）

産業組合から農業協同組合について

明治三十三年三月六日に産業組合法が制定され、その後、明治三十年の改定によつて信用事業と他の事業を兼ねることが出来るようになり、政府は産業組合を通じて農家と低利子で資金を融通し、農家の経営を有利にするために、販売活動や協同購入の急速な発展を見たのであった。

大正七年十一月十一日大保木信用購買販売生産組合が設定された。これは農林業に活気を与えるものであると認識され、信用組合が保証と責任を持ち、組織の強化が行われた。

昭和二十年九月六日に全国農業会令が公示され、全国農業会となった。

昭和二十二年十二月農業協同組合が発足になり、農業会は解散した。大保木村の農業協同組合は昭和二十三年三月二十日に設立した。

大保木農業協同組合の昭和三十九年三月三十一日当時の実績について、正組合員は640人、準組合員は10人の計650人、組合員戸数は649戸数であった。

預金及び現金 8,484円、貸付金 8,707円、資産合計

37,970円、預金 18,806円、借入金 2,168円、出
資金 4,014円、生産高 和牛 130頭、豚 50頭、鶏
3,000羽、麦 5,000俵、蜜柑 1,000貫、柿その他
30,000貫、蔬菜 5,000貫、木炭10,000俵（愛媛県
産業組合連合会の資料による）

六ヶ村の物産について

菓種 西之川山村輸出す。

茶 東之川山村、西之川山村、中奥山村、大保木山村輸出す。

薪 大保木山村、黒瀬山村輸出す。

炭 中奥山村輸出す。

楮皮 東之川山村、西之川山村、中奥山村、大保木山村、黒瀬山
村輸出す。

實 西之川山村、中奥山村、大保木山村輸出す。

棕櫚皮 東之川山村、西之川山村、中奥山村、大保木山村輸出す。

竹 兎之山村輸出す。

木材 東之川山村、西之川山村、中奥山村、大保木山村、黒瀬山
村、兎之山村輸出す。

民業について

男は郡の東南13村は山林に属し、其の民は農耕を専とす。或は
農耕、采薪、焼炭を業とする者あり。其の生を営する難しく、女は
全郡皆男業に従ひ、別に営業なし、人心は温順なり。以上、新居郡
史による。

大保木村の山の神と山岳信仰

信仰の始まりについて

人里離れた山深い自然の中に、一人で山歩きをすると人の魂から出たテレパシーが木々や自然の中から出る。目には見えないエネルギーに触れて安らぎを感じて、人間が持てる身体の機能をフル回転させる。(森林浴)

この自然の力を利用するため、修験者しゅげんしやが山奥の地を選び、そこで修行し、呪法を修めたと思う。人は皆でいると自分中心に動いていると錯覚するが、独りで山奥に入ると昼間でも木々が生い茂り、薄暗く、風の音や木々の騒めき、湧き水の音、小鳥や虫の泣き声など何か分からない音が聞こえて来て、周りに立ち込めて来る森の冷気が肌に触れ、鳥肌が立つ。

昔の人の話によると神隠しに遭ったり、道に迷ったり、突然暗くなって見た事もない所を彷徨ほうこうしたり、一時脳の働きが停止したような状態に陥る事もあり、山の恐ろしさを知る。その山の魔物が山を守り、山を豊かにして来た話を聞いている。(大木のある所には必ず、山神さんを祀って大切に保護されている。)

森には、不思議な事が多く、中奥の向の山には、昔、草木を薙ぎ倒した大蛇が通った跡があったと古老から話を聞いている。現在でも、天河頭の近くで(龍王山)頭が二つで尻尾がない、胴体の回りが20cm〜30cmもある、長さが2m位の大蛇のような見たことのない生き物に出会って怖くなり、急いで下山したという話を今も聞いている。

山奥には、理屈で計り知れない闇の部分がいっぱいある。そして、何か分からないが自然の大きな力に押され、いろいろなと錯角に陥る。人間も大自然の中では、ちっぽけな存在であり、自分の力の限界を知る。そして何か大きな力を求めて縋すがりたい気持ちになり、自然の力に負けまいと精神的な高揚が大きな御山おやまに向かつて、手を合わせ祈る心が生まれる。これが原始宗教の始まりだと思う。山に入る時には、身を清め、山神に物を供え、祈って山神を怒らせないように山

に出掛けた。その為に山の危険な場所や山道の傍にはいくつもの山神を祀つてある。

中奥字細野の向の山には特に多くの山神を祀つた跡がある。中奥の坪石にも笠松かさまつがあつた所に小さな山神があつた。

そして、山岳信仰が起こり、山を敬う信仰が生まれた。そこには危険な場所があり、お地藏さんや山神さんを祀り、人々の注意を促している。これも人の生活の知恵だと思ふ。

山岳信仰について

古来の山岳は狩猟民には獲物を与えられる動物の主である山の神の住む霊地であり、農作物や生活に必要な水を与えてくれる水神さんの居所として崇められてきた。また、鉱物資源を与えてくれる聖地ともされてきた。

山中で浄化した祖霊は山の神になり、春先には山を降りて里の神となる。農村の神社は山中の山宮と里宮を設けて、春と秋の年2回の祭りを行うのは、この信仰に基づくと説明されている。山の信仰が更に発展して山岳そのものを神として崇める神体山の信仰を生み出していった。仏教が輸入されるまでは、神道しかなかった。

西条や小松、任生川にゆ、丹原たんぼらは伊予の高根（現在の石鎚山）を崇拝した。西条には特に古代に、八堂山に石鎚山を崇拝した跡があつた。垂仁天皇（前二十九〜七十年）の御代に忌部宿弥八十彦が社殿を妙口に建造し、石土神社とし、忌部家の氏神とした。現在の石土神社である。大保木や中奥は龍王山を崇め、特に、大保木字伊忠原の住人は土佐からの落武者で龍王山権現を崇拝している。黒瀬は石鎚山や龍王山を崇め、大生院地方は笹が峰を崇めていた

仏教伝来と宗教戦争について

古代には地元の山を神として崇拝する信仰が始まり、その後六世

紀頃（538年）に仏教公伝によつて、百濟聖明王仏像などが伝わり、上宮聖徳法王帝説もある。

552年になつて仏教が伝わり、仏教の礼拝の可否について論争が起きた。その後、大和時代589年当時疫病が流行し、その原因は仏教伝来に起因するとして、物部守屋が仏像を難波の堀江に投げ捨てるなど、神仏の宗教戦争が起こり曾我馬子が物部守屋を滅ぼした。その結果、國の重要な文献が失われ、古代の伝承や神道が衰えていった。

土佐の東部に物部郡と云う所があるが、そこに物部氏の落ち人が住み着いたのではないかと思う。

神仏混合について

聖徳太子頃になつて、神仏混合となり、その後、神道の信徒たちも同時に仏教を信じるようになった。そして、仏教を信じ安い形に変えていった。古いお寺の境内の中には、現在も鳥居が残っている。例えば、善通寺等。また古い神社には別当寺があつた。

日本人を性格づけているのは、今も昔も神道が根底にあつた。山に登つたり滝に打たれたり、物理的、肉体的、感覚的に刺激を与える事で神の世界に近寄れるという考え方があつた。

明治政府によつて修験道は禁止になつたが、現在も石鎚山の信仰を中心にした石鎚神社や真言宗極楽寺が残っている。

次に、聖徳太子の略歴と関係事項を挙げておく

593年 飛鳥時代 聖徳太子摂政せつしやうになる

594年 推古天皇2 仏教興隆の詔

596年 推古4 聖徳太子伊予の道後へ来る

604年 推古12 憲法17条制定

607年 推古15 法隆寺建立

聖徳太子（574～622）

用明天皇第二皇子で推古天皇の摂政をつとめ、また、日本仏教の祖と云われる。厩戸豊、聡耳命、上宮太子、法王、法主王、夢殿王子、斑鳩法王、聖徳王などと多くの呼び名がある。14才の時に蘇我馬子を助けて物部守屋を討った。21才で三宝興隆の詔を発し、28才で「法華経」「勝鬘経」などを講じた。31才で憲法十七条を制定、34才で小野妹子を隋に送った。また、「天皇記」「国記」等を編集し、四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、池後寺、葛城寺などを建立している。

民族学的には太子が偉大な人を表し、いろいろな願いを成就してくれる信仰があった。太子講は聖徳太子信仰と結び付いた講である。「勝鬘経義疎」1巻、「維摩経義疎」3巻、「法華経義疎」を609～615の七年間に著した。

仏教理論から大乘教を重視して法華経を選び、実践生活としての勝（女帝推古天皇のために）と維摩（太子自身の左俗生活）を選ばれ、平安期以降の写本・版教が伝わるのみであるが皇室の公有財産として現存する。この三義疎は日本人として最初の仏典注釈書であり、意義もおおきい。奈良時代には太子信仰の興隆によって一層普及した。（仏教民族辞典による）

仏教は六世紀頃に輸入された。それ以前には、日本に神道しかなかった。儒教もきたけれど結局、日本の信仰を変えることは出来ず、実は神道の信徒たちが同時に仏教をも信じた。

宗教に対して日本人の性格づけは今も昔も神道である。古事記時代には仏教があったが神道的で、山に登ったり、滝に打たれたり、物理的・肉体的な感覚に刺激を与える事で神の世界に近寄るという発想があった。また、仏教を信じ安い形に変容させ、神仏混交の古い

お寺にしていまい、今も境内に鳥居が残っている。
現在は石鎚山の信仰を中心にした仏教が残り、そして、石鎚信仰を
よう捉えなかつた宗派はなくなっている。

「物部氏の墓」の白黒敷石について

奈良県立橿原考古学研究所は平成九年（1997）六月二十日古
代豪族の物部氏の墓とされる大型古墳「ハミ塚古墳」（奈良県天理
市岩屋町、六世紀末〜七世紀始め）の横穴式石室から、床一面に敷
き詰められた白と黒の小石計七万九千個が見つかったと発表した。
白黒の表現は古代中国の「陰陽思想の影響と見られる。物部氏が仏
教受容を巡って崇仏派の蘇我氏と交えた戦いは「仏教対陰陽五行の
構図の思想対立だったのかもしれない」としている。

同研究所によると陰陽五行は「継体天皇七年（513）百濟から
五経博士が渡来した」（日本書紀）際に伝えられたとされるが、そ
の後間もなく仏教が伝来し、陰陽思想を唱える物部氏と崇仏派の蘇
我氏が対立したと見られる。物部守屋は587年に蘇我馬子に
滅ぼされた。

奈良県立橿原考古学研究所は平成九年六月二十一日（土）古代豪
族・物部氏の墓とされる大型方墳「ハミ塚古墳」の横穴式名室から
床一面に敷き詰められた白と黒の小石計七万九千個が見つかったと
読売新聞に発表した。

蘇我の崇仏と物部の排仏の騒動が起こり、きすう帰趨がはっきりした時
点で物部一族が崩壊した。

神道も最大支持者の豪族が亡くなったため、仏教の採用をあつさり
と決まってしまったが、神道を禁教にしたりしなかった。

その後、仏教化したが在来宗教の神道と新興宗教の仏教との戦いは熾烈だった。奈良時代になると神仏混合（習合）が始まった。（日本書紀による）

中世になると上は朝廷から下は庶民に至るまであらゆる階層から、熱烈な信仰を集めた。

修験道は原始山岳宗教を基調とし、仏教的表現をしたものと言える。現地調査を実施した結果、原始信仰がない所には修験者は現れないと分かった。石鎚の麓の最も古いお寺と関係のあった人々法安寺聖徳太子正法寺 聖徳太子と秦氏熊野権現を勧請して寺を建てた。

龍王山について

石土山が開山されるより前、瓶ヶ森山より前、龍王山が山伏の修験道場であった頃、天河寺もあった。天河寺跡から約百メートル登ると標高740メートルの龍王山に辿り着く。その龍王山には石鎚金剛蔵王大権現を祀っている。

修験道の祖である役の行者神変大菩薩が、伊予國石鉄山に白鳳八年（675）入山し、龍王山に籠もられ、密言浄土の実現を祈りつつ、厳しい修行を続けられたと云う金色燦然と輝く御来仰を拝され「阿弥陀院三尊」更に利益輪身として変化せられたところの石土蔵王大権現を感得された。

頂上には稲荷社があり、そして石灯籠が一对建っている。役の行者の修行の聖地である。頂上は狭く、千野々や極楽寺の周辺が良く見える。山岳信仰の原点地でもあり、極楽寺や仙徳寺の真言宗系と天台宗系の両派の強い勢力を持ち、龍王信仰に置ける影響があった。現在も極楽寺が龍王信仰を守っている。

役の行者の呪術は「孔雀くじやくの呪法」と云われ、雨乞いのために、盛んに修められた水の神でもある。龍は雨を支配出来る。次第に龍王

と同等の価値に置かれるようになった。農民は山の神に豊作を祈り、山に祀られた水分神への祈りと龍王への祈願があった。そして、天台宗系、真言宗系、の両派の強い勢力を持ち龍王信仰の影響があった（大同元年806年頃）

次に、役の行者の略歴と関係事項を挙げておく（伝承によるものである）

656～7年 齊明天皇2～3 伊予大三島を訪れ、瀬戸内海の海賊の首領の越智玉興から唐紙黒仙紙紹興蜆江省内の市名）紙の紙漉枠の大きさを縦に半分切った半切と半紙判に切り揃えたものとの2通をせしめる

657年 齊明天皇3 20才の時龍王山で修行、石鎚山に入山

658年 齊明天皇4 金剛山頂明王堂で日常瞑想と「修験：道経疎」の執筆に費やす

666年 天智天皇5 30才で古来の山岳信仰と密教が結びついた新しい宗教が誕生

役の行者について

634年大和国葛城郡茅原に生まれ、657年には大三島を訪ねて瀬戸内の海賊の首領の越智玉興から唐紙、書仙紙、紹興紙、纏漉枠の大きさを縦半分にした半切と切り揃えたもの2通りをせしめ、次の年に、龍王山に入る。

齊明四年（658）に金剛山頂の明王堂で、瞑想と「修験道経疎」の執筆に費やした。修験道の設定に当たっては、小角の実地踏査に義覚をはじめ紀伊九海士、和穂足、那智長安、新羅高升、十束室仲と桑田麻呂の面々が随伴し、山上ヶ嶽から熊野まで紀和山系の大日岳と釈迦嶽を霊地と定めた。本尊を定める為に専念祈請すると天地が鳴動し、憤怒の相貌を恐ろしき蔵王権現が霞みとともに湧き出

て給い。右手に三鈷杵を左手には刀印を結んで腰に案じ、右足を上げ立ち給う金剛不壞の勇姿で岩上に立ち給う。我は昔靈鷲山にあつて法華経を説いたが大峯修験道本尊の決定の話として伝えられている。

役の行者が感得した蔵王権現は大日釈迦の憤怒身であり大峯の行者之本院に祭祀したのは不動明王である。

石土蔵王権現を祀りしたのは(650～654)頃で神仏混交は(701～784)で天河寺の全盛時代は(785～1193)で石土神社を管理していた。

出自、年齢、性格、特技はまちまちなこの小角^{おずの}たちが当人と連携して、全国的な教化活動を展開することになった。ほぼ二十年かかりで、小角たちは講場を設け、その成立は天武十二年(689)頃である。

役小角の五大弟子と云えば義寛、義玄、義真、寿元、芳元が挙げられる。この五人は、小角に仕えた前鬼の五人の子、五鬼童、五鬼熊、五鬼継、五鬼助、五鬼上されている。これも後世に付け加えられたものである。そして、文武天皇三年(699)伊豆に流される。次に、行者堂は修験道の開祖役小角を主尊像として安置した堂宇である。役小角の信仰は中世末期以降全国に広く浸透し、各地に行者堂が建立された。

石鎚の麓にも、千足村の黒川と成就の中間地点に行者堂があり、修験道の理想的な開祖として役小角を祀った。現在は西之川の下谷のロープウェイの所に移転している。(大法輪10 7月号による)

不動の滝について

天河寺跡から下り坂を暫く行くと雨乞谷に着き、この川を祓川や取川と云われている。

権現さんに参詣する人は、ここで身を清め、祓はらいをし、行ぎをして登山した。川に沿って少し上がると「不動の滝」が見え高さ30m以上もある大きな滝である。

瓶かめケ森と笹ささケ峰がみねについて

瓶いしづちケ石いしづち鉈けんげん権現べつどうじの別当寺とされている今治市の「石土山石中寺縁起」（霊峰石鉈山による）には瓶ケ森と笹ケ峰、子持権現山とのかわりを記している。

「文武ぶんぶ天皇の大宝元年（701）に役行者えんのぎょうじやは伊予府中なる石中寺不動院に御飛来にて、此の寺を大道場とせられ孔雀明王、不動明王、愛染明王の法によられ大誓願を発せられると、不思議にも空中五色の雲に樽原、石土、豊岡、象頭の大権現の弥山を決定する為め石中寺を後に東へ向かって色々練苦の末、暫く子持権現厳密につき、草衣木食で一応にお念じになると瓶ケ森に観音、その前に薬師が現れて、行者と法仙は身軽くなって子持ちの峯に浮き上がった。その時に即身頓覚峯化して、剣石（父）となり、笹ケ峰（母）となり、ありありと石中寺道場に出現、そのままの石土権現が剣石に地を示された。行者は急いで剣石に登り、ここへ権現を俸祀し、弥山を決められると高くお上げになった右手の三鉈から御行、右足から御水が出た。行者は此の有り難き御尊体を土にて現し終えると、同じ御尊体が笹ケ峰に現れたので、行者は此の峰に権現を拝んだ所また子持ちの岩山へ権現が現れたと見る間に、その山が膨れ伸びて忽たちまち子持権現となってしまうた。そこで目出度くこれを俸祀した。

この時鳥獸までが子持に集まって嬉しかったと云い伝う。行者は法仙に、女人は剣石を避けて笹ケ峰で権現を拝み、男子ばかり剣石に登って拝み、子持権現では殊更ことごとに身を清め、心の垢を払ひ精進し

て権現を拝み、剣石（天）、笹ヶ峰（地）とこの子持（人）と一体に利益成就、衆生済度をするが良いと云われて、行者は豊岡山へ飛び行われた。法仙は御礼を申し上げて権現を戴き、石中寺へ帰り本尊として安置したと書き伝えている。

石中寺の開祖は法仙と伝え、石鎚山の開祖は役行者と法仙とするのであるがこの二人の体が宙に浮く。その時に即身頓目覚峰化し、つまり生身のまま俄に峰となり、その一つが瓶ヶ森、一つが笹ヶ峰である。そして、奈良時代から神仏混交が始まった。（石土山石中寺縁起による）

行基菩薩 天地天皇七年（天平二十一年（668）749）について

行基菩薩は天智天皇七年（668）に大阪府堺市に生まれ、15才にして奈良の東薬師寺に入り、仏道修行とその研究に励み、24才で受戒得度をされた仏教の学問をよく高め、天皇の尊敬を受け現在の平城の聖域に遷都することを奏し、元明天皇の和銅三年（710）平城に遷都した。その造営にあたり、南都諸大寺の移建と建立、例えば、薬師寺、大安寺の移建を始め興福寺及び、総国分寺東大寺の建立等48ヶ大寺院を建立された。その他全国にわたり、開基した寺院や道場は約700におよぶと云われている。一方民生社会事業としても実践主義に徹し庶民を教化し、人為に橋をかけて提を築き、池を掘り、日本最初の独残院や日本地図を作った。又飢えと大病に苦しんでいる庶民の救済として布施屋（宿泊所）施薬院などの社会の為の事業を次々に行い庶民の信仰を深め、奈良朝に於ける國民思想の確立を計画され唐朝の文明文化を輸入し、奈良朝文化に貢献された恩人である。今日の庶民仏教と社会福祉の基を開いたのは、実に行基菩薩と云われている。聖武天皇大平二十一年

(749) 八十二才の時奈良西部の菅原寺で数千の弟子に囲まれ遷化し、生駒いこまの住生院おうじょういんに葬られたがその生涯にかけての業績の偉大さは1200有余の今日もなほ多数の人々の心の中に行基菩薩は生きているのである。奈良時代の高僧である。

(昭和四十五年三月 奈良市長 鏈田忠三郎がJR奈良駅前に碑を建立、その碑による)

なお、平成十一年六月の朝日新聞記事によると京都府大山崎町教育から幾内四十九寺院の京都、山崎院跡で本尊として如来像の指定の一部(丈六の仏像)が出土したと発表した。人皇第四十五代聖武天皇の天平十二年に相当し、行基菩薩が瓶ヶ森に南嶺山大福寺を建立、現在は加茂の荒川に移転(南嶺山大福寺縁起による)

当時の伊予新居の動き

①天平勝宝八年(756) 東大寺は伊予國新居の地図作成

②芳元は三十才の時、大峰山で修行し、天平勝宝五年(753)伊予国石鎚山に熊野権現かんじょうを勧請した。

南嶺山大福時について

当山は高野山真言宗南嶺山地院大福寺と号し、開基は今を去る壹千貳百四十壹年人皇第45代聖武天皇の天平十二年(740)に相当し、行基菩薩の創建するなり。天平十年(738)十月、聖武天皇奈良大仏の工を起し給うや行基菩薩諸国を周遊山野を逍遙しやうようして之が工を助けられる。

其時に際し先に神変菩薩を開き、石鉄の峰の叡旨に応え、大権現に祈誓を凝して、躬親ら萩の木を以て一刀三礼し、地藏菩薩併せに脇士二躰を彫り名乃谷山の荆棘を聞き此尊を安置す。之れ実に南峰山の宏講、大福寺に下って天正年中(1578~1585)長曾我

部元親の兵乱に罹り、堂宇伽藍 宝古記類ことごと悉く灰儘はいじんに帰す。
慶長十年（1605）寛順上人代に荒川の現在地に移転して376
年を経過して今日に至る。

写 南無本尊威光倍增

先師尊靈追福菩提

昭和56年7月14日

三十世現住恵晴謹記（尾池恵氏）

此の時代に関係のあつた神社と大寺院

和銅五年（712）・・・三嶋神社創建（小松町）

天平元年（729）・・・伊予の国分寺創建

天平十三年（741）・・・国分寺・国分尼寺建立の詔

天平十五年（743）・・・大仏造立の詔を出し、紫香樂官に工事

が 始まる

当時の奈良時代には石鎚山近くには法案寺と正法寺の二ヶ寺だけで
あつた

天平感宝元年（749）・・・東大寺大仏ちゅうざう造終わる

天平感宝八年（756）・・・東大寺伊予国新居の地図を作る

天平宝字元年（758）・・・金剛宝寺（宝寿寺）創設

今宮八郎兵衛については石鎚権現を背負つて来たと云う話が残つ
ている。

この家は石鎚山の草分けの家で初代の八郎兵衛は、石鎚開山の行者
を背負つて登つたと云い、この行者の人を駆り集めて登山道を切り
開いた時は、まだ時計が無かつたので向こうの山の中腹にある岩（法
仙がえしの目鼻石）に夕日の当たる頃になると、法螺貝ほらがいをとつて仕
事仕舞いの合図を吹き鳴らした。

その朗らさに朗々として、木霊こだまし三里さんりも上の山頂まで鳴り響いた

と云う。この口伝えの巻物は同家に伝わっていたが、それを貸してから無くなり、八郎兵衛の系歴が分からなくなった。明治時代の正月には、細野の庄屋に羽織袴はかまで正装して挨拶に来たと話を聞いている。大正時代には今宮も大繁盛であった。

西之川の高須賀家も古く続いた家（西之川の庄屋）明治になって火事で灰燼はいじんになり、記録が伝わらず。権現さんは瓶ヶ森や笹ヶ峰にましましたと言いつた伝えがある。然れども石鎚山祭礼の時は、小兵衛がかみしも上下を着て帯刀たいとうをつけ、人々に負われ上席に通る事今に常となると言い伝えがある。

弘仁十三年（822）頃に成立した日本最古の仏教説話集（転生）について

大和の薬師寺の僧景戒が、九世紀の初期に書かれた「日本霊異記」で伊予国神野郡に石鎚の神を祀る石鎚山と呼ばれる山があった。険阻で行を修めた清浄な人のみが登れることが出来たが、寂仙が修行し菩薩あがと崇められていた。

寂仙は天平宝字二年（758）死後28年後に国王の子が生まれ、神野と名付けられると言いつた残りして死亡した。28年後桓武天皇に皇子おうじが生まれ神野親王と名付けられたので、神野親王に転生したとの話が伝えられている。元慶二年（878）に書かれた「文徳実録」にも「日本霊異記」の転生と類似説が伝えられており、神野郡に灼然と称していた高僧の弟子上仙がいて、高山笹ヶ峰の項に住んで修行し、鬼神を自由に使役しえきした。天皇への再生を予言して死亡、また、橘姫たちばなひめも来世は上仙と一緒に過ごしたいと云って死亡した。

28年後に桓武天皇に皇子が生まれ、神野郡の出身の乳母が神野と云ったことにより、神野親王と名付けられたので人々は生まれ変わりと信じた。その後809年に嵯峨天皇の仰諱（敬つて口にしたちばなのさとない）を避けて、神野郡を新居郡に改称した。また、同郡橘たちばなの里に「橘

の「おうま嫗」と云う者がいた。家財を傾けてまでも上仙を供養した。上仙の死後嫗の悲嘆一方ならず「私上仙様に死なれては、最早、此の世に望みはない。どうか来世には、一緒に生まれたいものである」と云って、其儘死んでしまった。すると間もなく五十二代嵯峨天皇が御降誕遊ばされた。

先朝よりの制度として、皇子御降誕の時は乳母の姓を以て名とするので帝の乳母の姓は神野（かみの）と云うたから、之を帝の御諱とした。即ち上仙の終身である。

旧大保木村の氏神様について

旧大保村に鎮座する森岡神社外四神社につき、故十亀和作宮司そがめわさくぐうじさんが、その祭神、由緒などを書かれた貴重なものである。

(一) 森岡神社

新居郡大保木村大字黒瀬山字森甲六百四十一番地鎮座

一、祭神伊邪那美命 相殿 速玉之男神（はやたまのをのみこと）
事解之男命（ことときのおのみこと）

一、由緒

宝暦二年八月、伊藤家焼失の為日記を失い不詳と雖も、孝元天皇御末武内内大臣太宿弥の子孫伊藤多郎右衛門尉、天正十二年春陽当山城を築く（之を奥の城と号す、現今新居郡大保木村大字黒瀬山字百合城と称すところに同人築きし城跡あり）

茲に同年大和国より城の守護神として勧請す。同十三年西七月毛利勢侵入す。伊予国大小名亡ぶ、此時多郎右衛門長男伊藤九右衛門記政神体を守護し背負ひ、黒瀬山森と称する所に來る、同年十一月十五日仮宮に遷す。その日を以って祭日となしたりと伝えたり。

寛永十一年甲戌十一月再建の棟札を存す。従来地名を以って森権現と唱へしを、明治五年維新に際し県社石鎚神社へ引渡しと同時に

森岡神社と改む。明治四十年一月七日共有地宅地三十四坪外十三筆の土地を神社有地に変更し不動産財産を一年維持方法設定申請し認可せらる。

(二) 大元神社

新居郡大保木村大字中奥山字千野々一番耕地三十五番地鎮座

一、祭神 国常立尊（くにのとこたちのみこと）素盞鳴命（すさのをのみこと）

一、由緒

天智天皇土佐国朝倉へ行幸給いし時、御供九条右大臣範良郷は白川殿式部郷藤原貞範公（藤原貞範は式部郷正三位工藤貞範の事なりけりとあり）朝倉木の丸殿に止まり同殿の社を守護し奉り、国司神主となり代々子孫相勤む、貞範十一代の孫従五位工藤山城祐良の子工藤丹波神祐家建久年間豫州山中藤合と伝える所に大本大明神を山城国より勧請持参の神にて茲に住居すと旧記に見えたり（現今大元神社の鎮座所、同工藤丹波守の屋敷を藤合と云ひ伝へたり）明治五年維新に際し県社石鎚神社に引渡し、同社管轄する所となり、同十二年神社明細帳届出の際如何なる故か大本の字を元の文字に改め提出さる、方今大元神社と社号す。

明治四十一年三月十一日工藤家子孫工藤藤太郎より維持金八百五十円を寄付し、神社境内外風致林を永遠に至るまで禁伐採として保存することを決定、記念碑を境内に建立す。氏子積立金を併せて壹千円の額に上り維持設定を申請認可せられる。

(三) 古長河内神社

新居郡大保木村大字中奥山字淀三番地耕地八十一番地鎮座

一、祭神 譽田別尊 相殿 仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）竹内宿弥（たけうち）

一、 由緒

延暦二年本殿火災に罹り旧記を失い為に由緒不詳と雖も住古源頼朝公の後裔天正年郡葦生郷岩界山の城主代々葦生八幡宮として天正十二年に至る迄同城内に祭祀せらる。

城主伊藤大膳時重なるもの長曾我部元親との戦ひ大いに乱れ、同十三年十一月十五日来る（現今新居郡大保木村大字中奥山字淀之なり）其の日を以つて勧請す。何時の頃より河内神社と社号す、依つて毎年陰曆十一月十五日を祭日と定め伊藤家子孫代々祭日には例なりと伝へらる。

寛文年間旧西条藩領主松平頼純朝臣封境御巡視の際右神社の社前に乗物を止められ御門の両脇に武運長久祈願の為杉二本を植奉り今尚老杉生茂り、之を松平頼純公御手植の御門杉と云ひ伝へたり。

明治五年維新に際し県社石鎚神社の管轄となり境外末社の姿となり居りしが、明治四十二年七月一日を以つて、同大字細野鎮座同字産土神長尾神社及び同大字字前田鎮座同字産土神古森神社の二社を合併認可を得て同時に社号を古長河内神社を改む。

昭和二十一年、大東亜戦争の終結により神社は宗教法人として取り扱いを受けることとなり、同時に信教の自由により政府が干渉せざる事となりたる為、前田氏子中の要望により古森神社を分祀移転、之により古長河内神社と社号す。

(四) 大宮神社

新居郡大保木村西之川山字名古瀬谷丙三番地鎮座

一、祭神 素盞鳴尊 相殿 大己貴命（おほなむちのみこと）牛頭

天皇（ごずてんのう）

一、由緒

抑当神社の由緒たる往古天正年中豊臣秀吉四国を征討す、秦元親が秀吉と抗戦し終に戦敗れて死す、元親の部将高州像を負ひ当西之

川山に來り開拓し産土神と崇め祀ると云う。

右に云ふ所のものは只古老の口碑に存するものしにて史非ず、故に年曆沿革等遼遠にして今尚考ふべからずと雖も所に據れば慶長二年社地を撰び現今の宮地に仮宮を建て十之に遷し奉り其の日を以つて毎年祭日とす、明治四十三年月十三日と改む。

明治五年維新に際し県社石鎚神社に引渡し同社の管轄に属し境外末神社の姿となり居りし十一年に至り神社永遠維持設定を申請認可され、以来独立の無格社となる。

(五) 高智八幡神社

新居郡大保木村大字東之川山字官之平四番耕地三十七番地鎮座

一、祭神 譽田別尊（ほむだわけのみこと）素盞鳴尊（すさのおのみこと）

一、由緒

当高智八幡神社は元祭神（譽田別尊）一柱を祭らる。

土佐国香我美郡山北邑黒森城の祭神にして城主代々崇敬厚く慶長年間に至る迄、茲に於いて祭長十七年同城主工藤兵部丞第大五子工藤隼人範重中侍数名を従え、伊予国新居郡の山中に來り。

土地を拓き、此所に住居を定む（現今東之川山陣ヶ森之れなり、今尚同人の屋敷跡を存す中茲に奉遷す。）寛永年間に至り当東之川山部落中央たる字神上と称する所に一つの神祠を建設し茲に神靈を奉遷し、東之川の産土神として大いに崇敬せらる。寛文八年に至り徳川家康公第十子紀伊大納言頼宣二男旧西条藩主松平頼純朝臣領地巡視の御参拝あり以来代参祈願神殿建築等ありて大いに信仰を厚くせりと伝えたり。天明年間東之川山字神上に祭祀せらる神祠等洪水の為に流さる（今の宮の平之なり）茲に神祠太鼓等漂着したるを以つて宮所と定め一つの神祠を建て神靈を奉遷したる日即ち同年陰曆十一月四日を以つて毎年祭日とす（明治四十一年より十二月八日

を以って祭日と改めしが大正五年に十一月十五日に改む。）明治五年維新に際し県社石鎚神社の管轄する所となり故に境外末社の姿となり居れり、神社明細帳に高智の二字を誤って除き退出され、明治四十一年迄八幡神社号たり。明治三十年石鎚神社祠官より独立神社の理由を届け出られ茲に独立の無格社と改めらる。明治四十一年十二月十六日新居郡橘村大字西田、村社荒神社（祭神素盞鳴命）を合併同時に村社高智八幡神社と社号を改む。

中奥字今宮について

今宮出身の伊藤保の話によれば、豊臣秀吉に敗れた長曾我部元親の重臣であった、伊藤八郎兵衛地所係りの藤原氏を連れて、今宮に住み着いた。今宮神社の神殿は、素鳴命 西宮大宮、伊藤八郎兵衛の霊を祀ったので参拝神社と云われている。現在は石鎚神社に合祀している。

次に、藤原ユミ氏の話によると、昔は、河口の伊藤光次郎氏の所から上がったが、昭和四十年には橋の袂に大きな二階建ての曾我部七蔵氏の家があった所から登った。

ずっとくねくねした道を登っていった所に四手坂があり、そこには石鎚山36王子の一つであるいずおさんがあった。そして四手坂王子があり、そこにお宮があつて休む所もあつた。お山市の頃に一休みして登ると広い家屋敷や大木があつた。そして一時3軒の家もあり、トコロテンや飴湯等あめゆを売る茶屋もあつた。

明治の神仏分離以前には、別当前神寺の上人しんじゆうじんが石鎚大権現開閉等を毎月3月3日にこの所に来て執行した。前神寺の上人がこの所にくるにも又お山に登るにも迎え送りは、太郎左衛門が刀持ちをしていて、いつもご奉仕したと伝えられている。この家には代々太郎左衛門を襲名していた旧家である。

当主は藤原太郎左衛門で西条市祝谷に転居したが、現在は西条市洲

之内に住んでいる。

奥様の話では昭和初期では中奥字細野の元庄屋に毎年新年の挨拶に伺っていた。その時に羽織袴を来て鎧よろいや兜かぶとを身につけ、そして刀を付け正装であったと聞いている。

藤原家の経歴を小松の岡村の人に売ったと話していた。藤原家のすぐ上に地藏堂があり、旧盆にはそこで今宮の村人が夜を徹して盆踊りを踊った場所であった。そして曲がり角に椎の大木が生い茂り、その王子も覗きの行場と云っていた。昭和五十八年頃に氏神の四手坂神社を西条市船屋のいずみ神社に合祀している。そして藤原ユミ氏のご子息も安知生あちいに転居している。そこから斜めに坂を登ると四手坂があり、大きな祠ほこいは三光坊不動堂と云う香川県坂出出身者の行者三光坊の霊を祀ってあった。そして少し登ると今宮に出て四手坂の行場があった。そこには36王子があり、祭典の前には必ず行者が36王子を拜んで廻った。

次に登ると乳杉に出て来る。この乳杉の表皮を剥ぎ取って、皮を茹ゆでて汁を吸うと乳が出るようになると云われている。

その乳杉の表皮が剥ぎ取られて枯れないように、県は金網をかけ、とられないように対策を講じた。乳杉の所にはトコロテンや甘酒を売っていた。乳杉を越えて雨乞王子社の所には榎の大木が数本あり、ここにも行場があった。眺めがよく昔はここに金毘羅さんを祀ってあった。ここがまた今宮の雨乞いの場所でもあった。その上には、殿（八郎兵衛）がひらこうとした安場と云う平らな場所があった。

そこを越えて上がると王子の矢倉さんがあり、広い屋敷があり、今宮の登山道の中で一番見晴らしの良い場所であった。信者が座って飲食も出来、飴湯やトコロテン等を売る茶店もあった。そこには地藏さんが建っていた。その地藏さんを盗んだ人がいたが、物凄く偉い矢倉さんで矢倉にいぬる矢倉にいぬると云うて頭が上がりないので、元の所に連れて帰って据えたと云う話を聞いている。

そして順々に上がると大木が2本あり、女子坂（おなござか）と云う所があった。次にぐるぐる廻って登ると、その上にまた、王子さんが座っていて女人返しの王子と書いてあった。「昔、石鎚山に男神が登って、そこで供養してから女神を置いて石鎚山で好きな信仰をしていたら、雪が降って来たが高山だから、これだけ降ったら、女神はそこによる居られんし、何日かしたら女神を迎えに来ると約束したが、これ以上辛抱が出来ないだろう。大木が両方にあつて覗きがある女子坂に女神が来てそこに石鎚山から男神が降りて来て、迎えに来ると約束をしていたがこれ以上辛抱させるわけには行かないので、ここから女神を追い返した。そこを女人返王子と云っていた。昔は、わしが石を飛ばすから飛んだ所に居れと云うた」と云うが、今の人は嘘だと云っている人もいる。

西条市の伊曾乃神社を石鎚山の奥さんだという伝説もある。石鎚山の大神は女神を返し、別れてそこに小さなグロ（石）を積み、こんまい（小さい）お宮を建てお宮を女人返の王子と云って36王子になっている。

明治以前は河口からずっと頂上までの登る道に36王子があった。明治以降は祭典の前に成就じょうじゆの石鎚神社の係りの人が行きたい人（希望者）を連れて毎年弁当を持って廻っていた。

それからどんどん上がって行くと宿屋があり、その宿屋のある所を矢倉さんと云っていた。そこには石鎚山を祀っていた。その宿屋に泊まり頂上に登ることになっていた。

今宮の丸八と云う宿屋には石鎚山を探しに来て拓きよった人が辛抱しきれず逃げ出した人の人形を床に祀ってあった。これを何の地藏さんかと丸八のおじさんに聞いたら、この地藏は石鎚山を探しにきた人の人形を祀っていると云っていた。

丸八の所には偉い権現さんがいて、その3体の権現さんは足を上げている。

現在も建っているが頂上の権現さんは足を上げていない（蔵王権現の立像は平安時代後期1168年重文で、大峰寺、鳥取の三仏寺等にもある）

今宮に大きくて、立派なお薬師さんをどうしてお祀りしてあるのかと聞いたらこのお薬師さんには、子供が生まれても乳が出ないと子供が育たないので、米を持って来てお供えをして、どうか乳が出ますように願を掛けて、直ぐに飛んで帰ってその米を頂いたら、乳が出るようになり、方々からこのお薬師さんにお参りに来た。

そして順々に偉い人が亡くなり、その人の権現さんを成就の下（ロープウェイ終点駅の上）の前神寺にお祀りしてある。丸八旅館の床の間に祀ってあった人形について何ですかとお聞きしたら、昔のおじいさんと接していた人が亡くなったので、その人の霊をもここに祀ってあると云っていた。

その丸八も前神寺や石鎚山とも信仰上深い信頼関係になり、かなり詳しい履歴があった。

昔は石鎚山の頂上の大権現さんは、足を上げていた。それは仏か神か相当揉めたが仏で行きよった。前神寺の権現さんは足を上げていた。そして石鎚大権現と云っていた。現在の頂上にある石鎚神社大権現さんは足を上げていない。同じ石鎚でもこんなに違うだろうか。それで丸八と前神寺とが信頼関係が出来、石鎚山の履歴によると今宮は昔、殿（丸八）が土佐からこちらに逃げてきて、ここに家を建てて村を造ろうと云ったが、乳杉の上になるい（平ら）良い場所があったが、そこには水が出ない。そして生活が出来ないので乳杉から少し下がり、現在の今宮の所に4カ所の細かい谷が有り、水が出るので殿（丸八）は家を建て住まいを造った。

その丸八の宿屋の上に、明治四十四年四月一日に中奥山尋常小学校の分校が設立されたが、ロープウェイが出来、過疎が進み、児童がいなくなり、昭和四十七年に廃校になった。

そんな状況の中でも、逆に丸八の宿屋はどんどん発展して、夫が元気にやっている時には一晩に900人の信者を泊めたことがあったと、藤原ユミ氏は話していた。

そして丸八には相当な履歴があった。殿の云うのには、昔は今宮には姓が違っていた。丸八は家を拵えて、村の世話役が寄って、会を作ったときに様々な姓があつたのでは、村の偉いさんがややこしくて困るので村全体を伊藤姓に変えようと云ったが、四手坂王子の所の2軒の昔に履歴のある藤原家（藤原ユミ氏の尊父）が姓を替えることに反対した。その後今宮はほとんど伊藤にしたが、藤原家は藤原姓で通した。

昔、殿（丸八）と一緒に来た偉い人が亡くなると、若宮さんとして丸八の宿屋の上に瓦でお客さんを拵えて、その中に入れて祀っている。そして戸はぴしゃと閉まる瓦の戸であつた。その戸を開けてみると、その中には昔の履歴があつた殿の名前が残っていた。そして屋根をやり直したときに、中を見たら他の人の名前も入っていた。

丸八の子孫は皆亡くなって仕舞って、その養子になった人が、藤原ユミ氏の親戚の人であつた。そして夫の藤原慶晴氏（元大保木村の村会議委員）に後をやってくれと頼まれて、丸八の後をついで10年になった。（昭和四十五年）

そこには立派なお宮さんがあり、崩れないようにお宮を下の段に降ろしてグロ（石）を積み上げ今も祀っている。丸八の下のお宮に入っている人の名前を見たら土佐から来ていたそうである。これから腐ったらどうなるか分からないが、ここを拓いた人だから奇麗なお宮を拵えてその中に入れて祀つてある。夫からその名前を聞いたが忘れた。その姓は伊藤姓ではなかったと話していた。

丸八の旅館を売ったとしても、偉い権現には信者が付いているので泊まりの信者が増えていたと思う。養子に入った人も運が悪かったので儂らはこれから「用やらんから」夫にやってくれと云われて

譲ってもらった。そして引き継いだのは昭和三十年代の中頃であった。

それから10年になるが権現さんを売るんだったら、相当の値で売れるだろうが夫は売りたいくないと決意が堅かった。今宮が無くなるとしたら、今の奥前神寺に丸八の名前で祀ってもらったら、今宮からもロープウエーからも上がって来て、お参りが出来て、権現さんも喜ぶだろうと思ってお祀りした。

丸八権現さんは世間で相当な信者が増えた。ここにお祀りしたら、お参りをしない人がいなくなるくらい、人気がある権現さんであった。奥前神寺さんに丸八権現さんをお祀りしてあることを書いた看板を建ててくれるようお願いをしたが、前神寺さんは信者の寄付で建てているので、丸八権現さんを一番先に看板を出す訳にはいかないし、お仕舞いで良かったらと云われた。印しだけでも出してほしいが現在（平成七年）には看板は出ていない。昭和四十年ごろに履歴のある丸八権現さんに多くの信者が来て頂いて発展した。その時に他の宿屋が空いていても、丸八宿屋はいつも信者で一杯であった。そして土佐の人がきて売ってくれと云われたが、藤原慶晴氏はそんな事は出来ないと云って売らなかつた。

前神寺に合祀して置けば今宮やロープウエーから来ても、ここを通るからお参りしてくれる。

前神寺に合祀する時には神輿を担いで登ろうと云う話をしていたら、夫が亡くなったので、丸八権現さんを今宮に置いておくわけには行かなくなり、一旦河口に下げてロープウエーで上げて前神寺さんに頼んで合祀してもらった。そしてお酒を提げてお供えをし、その酒を頂いた。

奥前神寺の入った所に丸八権現を鎮座してくれてある。まだ、看板を出してくれていないのは辛い、これからも、偉い権現さんにお参りする人がいてくれたら良いと思う。その権現さんは足を上げ

ている。いつでもお願いしたらお参りさせてくれるし、そして、権現さんを大事にしておれば必ず発展し、ご利益を授かる事が出来ると思う。

今宮の住人が藤原ユミ氏一人にだけになった時（昭和四十四年～昭和四十五年）にも相当信者が来てくれ、非常に喜んでくれたこともあった。

今宮という所は殿（丸八）が造った所で、相当なご利益があると云うて今宮が無くなるそうですが、何か良いご利益がなかるうかと松山から訪ねてくれた人がいて、昔話をしてあげた。昔、履歴を書いた本を預かっていたが丸八と前神寺とが親しくなつて、本を貸してくれというので前神寺に持って帰った。そして火事に遭い全部焼けてしまった。丸八には何も残っていない。殿（丸八）が拓いて相応な履歴を残してあったが、話は語り継げば残るが焼けてしまったら、何も残らない。今宮の履歴について聞きたいと頼まれても、詳しいことは分からない。

昔は何処でも同じであるが、偉い人が亡くなれば若宮さんと云つて上の宮さん中の宮さん、下の宮さんの3ヶ所にお祀りしている。今宮の上には神社があり毎年の正月にお参りに行った。そこには大きな櫓けやきがあり、氏神を祀っていた。

現在、今宮の三拝神社は西田の石鎚神社の境内に合祀してある。知らない人までも参ってくれている。

ロープウエーは昭和四十三年に下谷から成就まで付き、今宮に泊り客がいなくなり、丸八の女将藤原ユミ氏は今宮の住人の最後の人になった。

昭和四十五年に町に出て、今宮には人がいなくなった。林業も機械化され、木材も売れず、人件費も出ず、近代化の波に押され、山仕事が無くなり、村人は皆町にでた。現在、今宮間で林道が抜けている。丸八の家も売れず、屋根は茅葺かやぶききで見事な大黒柱で、塗りも

良く、剥げたら金を出すとまで云われた立派な大黒柱があった。今も土地は売れず、持っている。

天井は樗で鴨居を拵え、家の中はピカピカしていたが、屋根裏に囲った萱や茅葺きの屋根が雨水に濡れ、その重みで屋根が落ちている。非常に残念だが仕方がない。涙が出る思いがすると話をしていた。藤原ユミ氏は高齢者に関わらず、語調は非常に流暢な調子で、今宮の生き証人として、長時間休憩も取らず、今宮の語り部として取材に応じてくれました。過去にも何回も今宮の歴史について語り続けて来られた人でした。

(平成七年十一月に藤原ユミ氏から聞く 白石史朗)

石鎚山の山岳信仰について

古来の山岳は狩猟民族には獲物を与えられる動物の主である山の神の住む霊地として、農耕民族には水田稲作や生活に必要な水を与えてくれる水の神の居所として崇められてきた。又、鉄物資源を与えてくれる聖地とされていた。

山中で浄化した祖霊は山の神になり、春先に山を降りて田の神となつて稲作を守り、秋の収穫後、山に帰つて山の神となる。そして、農村の神社では、山中に山宮、里には里宮を設けたり、春秋の二回の祭りを行うのはその信仰に基づくと説明されている。やがて、こうした山岳の信仰がさらに発展して、山岳そのものを神と崇める神体山の信仰を生み出していった。仏教が入ってくるまで、崇拝していた。

原始山岳宗教は近くの山を神として崇拝していた。大生院では笹ヶ峰を石鎚山として崇拝していた。長曾我部に追われ、土佐から山を越え来た大保木の伊忠原に住み着いた住人も龍王山を通じて石鎚山を崇拝していた。

西条にも古代の八堂山に忌部家の氏神として八十彦が社殿を建造

し、石鎚神社とし、石鎚山を垂仁天皇の御代に忌部宿弥の小松、仁生川、丹原では西日本の最高峰の石鎚山が「長寛勘文」に記載され「熊野権現御垂迹縁起」にも熊野権現がインドから九州の彦山（英彦山）へ、次に四国の石鎚、淡路島の譲羽を経て熊野に鎮座したとの伝承がある。その後、権現を熊野から石鎚山に勧請した歴史があり、英彦山神宮（権現）福岡県田川郡添田町の英彦山の上にある神々の主宰神は天忍耳命で古く修験者の道場として栄えた。英彦根山千二百メートル、瓶ヶ森千八百五十六メートル、大峰山の修験道の霊山があり、役行者の門弟として彦山の寿元、石鎚山の芳元がいた。瓶ヶ森の北の菖蒲峠には彦座という名の偉い神をお祭りしている場所がある。（この場所は九州の英彦山との関係があつたかどうか分からない。）

和歌山県本宮町にある熊野本宮大社は崇神天皇の時代に創建され、奈良時代になって熊野地方の仏教徒の行場とされるようになり、次第に熊野大社も仏教との習合が行われた。日本でもっとも早く権現形態の本地垂迹説をうけ入れたのも熊野大社であった。役小角えんのかどは熊野大峰山系に行場を開き、和歌山の宗教聖地の熊野神社（本宮）・熊野速玉神社（新宮）・熊野夫須美神社（那智）三社を総称して三山と呼び平安前期密教の修験道・修験僧の道場として聖地化され、その信仰は院政時代から中世を通じ皇室・貴族をはじめ武士・庶民に普及し全国的に盛行した。そして、熊野が権現信仰と仏教が習合していった。中世になるとあらゆる階層から熱烈な信仰を集めた。修験道というのは原始山岳信仰をもとに密教が加わり出来たものである。

神道と仏教との間で宗教戦争が起こったが蘇我の崇仏と物部の排仏の騒動で大勢の帰趨がはっきりした時点で物部一族が自己崩壊して仏教採用にあっさり決まった。勝った蘇我馬子そがのうまこや聖徳太子側も神道を禁止したりしなかった。

「日本書記」によると仏教化擦るに、在来の宗教の神道と新興宗教の仏教との戦いは熾烈であったが神道を禁止したりしなかつた。そして、神仏混合（習合）は奈良時代に始まった。役行者が瓶ヶ森に神仏混淆の一社を建立し、石鍬蔵王権現と号し、明治維新後、石鍬神社と改称するが、正保五年（1648年）横峰寺にある本堂再建の棟札にも石土山別当大願主権大僧都暁賢敬白と見えたり、「古は石土とかきしるし」「昔、役小角^{えんのかすの}始めて此の山に登り、その後、石仙といふ道人が山路を開き絶頂で神を祭りける由」とある。

石土神社は往古は伊豫土佐国境の瓶ヶ森山にあったものであり、その社の所属は土佐国であったものらしい。然るに後世修験道隆盛のある時代（役小角よりはるかに後代）に於いて道者の手によって瓶ヶ森から此の伊豫の高根に遷^{うつ}された。爾来此の山を呼ぶに石土（いわづち）山を以てしたのを何時頃から誤っていしづちと呼び始め、又何時頃よりか石槌山又は石鍬山と書くようになったものと想像される。

やがて、奈良時代になると、こうした我が国古来の山岳信仰に外来の道教、仏教特に密教の影響が見られるようになっていった。

山岳信仰と密教が結びついて、神道の信徒が同時に仏教を信じた。現在もお寺の中に鳥居が残っている。（善通寺、四国88ヶ寺の中にある）

山岳を仙人の住処としたり、仙薬を求めて入山修行するなど、山岳修行を行うようになっていった。

山に登ったり、滝に打たれたり、物理的、肉体的、精神的に刺激を与えることによって神の世界に近寄れる発想があった。

現在も主に石鍬山の信仰を中心にした仏教や神道だけが生き残っている。修行のために山岳や山深い山林を聖地として選び、そこで、行者や僧が思い思いの行を積んでいる。

修行者の多くは山中で法華経を持ち、陀羅尼を唱えて修行するこ

とによって超自然力を獲得し、その力を用いて呪術や宗教的な活動を行ったのである。吉野の比蘇寺、龍門寺、滋賀の崇福寺、長谷山寺などは、当時、これらの修験者が拠点とした山岳寺である。なお、後に修験道の開祖に仮託された役小角にしてもこうした山岳修行者の一人だったのである。

里人と違う山野の自然に溶け込んで古来の生き方を守る山の民も役行者に山仕事や水汲みなど奉仕もかつて出たと思う。

平安時代になると最澄が比叡山、空海が高野山を開くなど山岳仏教が隆盛し、比叡山の回峰行を始めた相応、大峰山で修行し、醍醐の三寶院を開いた聖宝などの密教の験者達はその験力を得るために山岳修行を行った。そして、験力を長めた密教の験者たちが修験道を作り上げて行くのである。

中世期にはこうして成立した修験道が全盛期を迎え、熊野を本拠として三井寺の後だてのもとにまとまった本山派、吉野を拠点とした大和の諸大寺の修験から成る当山派などの中央の修験を始め、羽黒山、彦山、白山、立山などの地方の諸山の修験が活発な活動をするようになっていった。そのため、白山山麓の永平寺を修行道場とした曹洞宗、身延山の七面山を道場とした日蓮宗、一遍が熊野で掲示をえて開教した時宗など鎌倉新仏教にしても、山岳信仰や修験道と密接な関係を持っているのである。

近世期には、山岳を拠点として諸国を遊行した修験者や聖^{ひつこ}たちは村や町に定着し、氏神や小祠小堂の祭りや芸能に携わったり、加持^{かじき}祈祷^{とう}などの活動に従事した。又、近世中期以降になると在俗の庶民たちが講を作って羽黒、富士、白山、立山、木曾御嶽、大峰、石鎚、彦山などの山岳に登るようになっていった。

そして、明治政府により、修験道が廃止されると羽黒神社、富士浅間神社、白山神社、立山神社、御嶽神社、大峰山寺、石鎚神社、英彦山神社など山岳にある社寺が、山岳登拝の信者を受け止めるよう

になっていった。更に、富士信仰を母体とする扶桑教、丸山教、実
行教、木曾御嶽信仰にも基づく御嶽教など山岳信仰を標榜する教団
が形成されもした。

第二次大戦後は旧本山派系の天台宗寺門派、修験宗、当山派系の
真言宗醍醐派をはじめ数多くの修願致団が独立した。又、石鎚本教、
大和宗、真如、解脱会など山岳信仰と関係した新宗教も数多く出現
した。(修験道辞典、宮家準東京堂出版)

大保木村は前神寺、奥前神寺、石鎚神社、横峰寺、石鎚神社成就社、
石鎚山頂石鎚神社、瓶ヶ森の子持ち権現、天河寺、極楽寺に囲まれ
た霊域にある村であった。

行者や先達(修験者)、信者が旧道を登拝し、村人と接すること
で村人も外部の文化が培われて来た。

又、神が王子となって顕現けんげんするとう王子信仰が王子神を祀る風習
は古くから行われ、石鎚山でも王子神の信仰も強く、氷見から石鎚
山に至る旧道の沿路に三十六王子社を祀り、現在も信者が王子を廻
る熱心な信仰をしている

愛媛大学理学部博士 村上瀬津太郎氏の実測(昭和二十五年七月一
日)によれば、一の鎖(下方に架かる) 30m 4本、一つの輪長一
尺五寸六分の連続(曾我部良秋氏によると河口にあったものを一の
鎖として石鎚山に大正時代に架けた。) 二の鎖(中に架かる) 49
m 2本、直径一寸以下のもちにくいもの。三の鎖(上方に架かる)
66m 4本、一つの長さ一尺六寸。番外(禅師ヶ森) 前の方52
m 裏の方24m 径四寸長一尺六寸五分。石鎚山への女性登山禁止
の時代に女性の石鎚山登山が始まる。

大正十三年(1924) 3月28日愛媛県師範学校より沼田実氏を
愛媛県立西條女子高等女学校第二代校長に迎える。

大正十三年（1924）7月25日石鎚登山。有志生徒15名、校長以下職員8名出発、往復黒川に二泊し、登山の目的を達し27日無事帰校す。

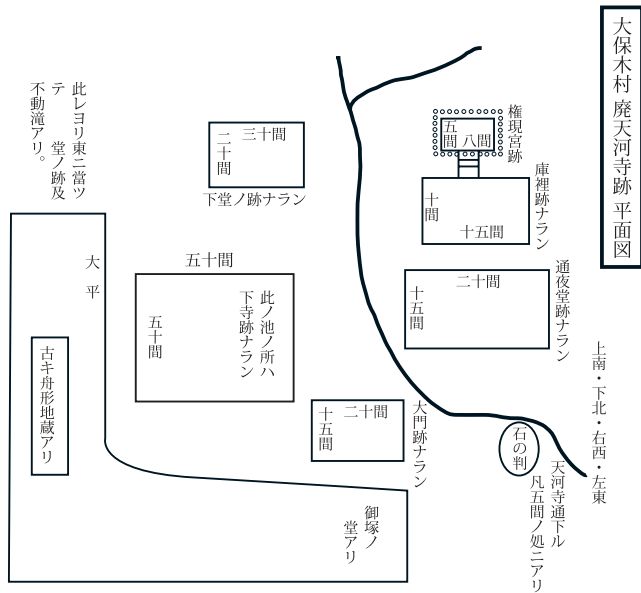
（西條県立中学校の記念誌による）

公には、女子が公立学校で登山にチャレンジをして無事に帰校したのは初めてであった。その時を前後して大保木村立高等小学校の女子生徒が石鎚登山に成功したので、次年の西條女子高等学校の石鎚登山には参加しなかったと云う話を聞いている。（吉田正子氏より）又、細野の出身者で進学できなかった女子数人が石鎚登山に成功した事を聞いている。

天海寺について

石鎚山に南北朝勅使が入って、朝敵退散を祈願をし、1342年に天河寺に細川頼春陣（足利方）をはった。天河寺も伊予の河野氏を攻めた時に長曾我部や毛利によって焼かれた。戦乱後、新居、宇摩の両軍は細川氏の所領を担った。

大保木村 廢天河寺



「里瀬山に幅一間余りの石に文字を彫付たるものあり、神作なりと云伝う、山中にて俗に石の判と名づく（中畧）此石蓋し上仙の刻みしものならんか、横峰寺に石仙の祠あり、石鎚山上を開きし僧はりと云、されば石仙即灼然なるべく、上仙其弟子にて師の志をつぎ専ら此登山を開きし僧なるべし」

とあるが、此の石は傷つき易き石質にて、戯れになしたる種々の後刻があつて、最近又観光登山の学生等が落書きしたかと覚しきものもあつて、最初の儘の様子は見られない。故に『西条誌』や『愛媛面影』に掲げた挿画の「石の判」二十字ばかりの中、福、寿、三、三等の文字は辛うじて判読できるので、私も友人伊藤雅英氏と拓本にも取つて見たが、天保頃（百二十余年前）には読みとれた筈の「上仙」の文字は全く認められなかった。ただ初めからあつたか、或いは後刻か知らぬが、「上仙」の字があつたことは注意すべきであると思う。此の道を北に下ると東大門・西大門・祓川・雨乞谷・王子・寺ヶ谷・杖立等の地名が残り、天河寺の末寺と称する坂中寺もある。此寺は、今天河寺の法燈を継承する極楽寺の末寺となつてゐるが、仁王門には稍原形は損傷しているが、芸術的価値の高い仁王像があり、昔から靈驗あらたかな、近郷近在に有名な観世音を本尊として安置する。尚、久野宥全という聖僧が在寺して、善男善女の渴仰をあつめ、五十年一日の如く本尊に奉仕している。坂中寺に隣接する浦山神社本殿には、旧天河寺の零体が合祀してあり、坂中寺の本尊と共に、拝見したく申し込んだが、千古の絶対秘仏という理由で、今に凡眼に入らぬのは研究上残念に思つてゐる。

此の山里に伝える伝説は頗る古い形式のもので、「筑後国風土記」にある説語と同じである。

「昔天河寺と、横峰寺に杉の大木があつて、亭々として天空に聳え、朝日さす其の影は、横峰寺山に達し、夕日さす其の影は、天河寺山にとどいた」

空海（774～835）

弘法大師空海は、宝龜五年（774）に讃岐国多度郡の郡司佐伯家に生まれ、幼名は真魚まおといった。

幼少の頃から15才まで母方の舅おじで阿刀大足と云う桓武天皇の皇子伊予親王の待講をつとめる儒教者について学問を習い長じて都に登り、18才にして大学寮の門をくぐる。20才で大学を中退する。その間に、山林修行者の群に身を投じ、四国や大和の霊場に久修練行（山中の窟籠、行進、断食、木食、草衣等を含む）の日を送る。特に伊予の石鎚山も聖ひじりたちの登って修業する霊山と云われていた。

また、「四国霊塚記」では「成就の蔵王大権現より東南に当たり九層の石塔あり自然拔出と云ふ、高さ20余丈、横四面各67歩、中に大日如来まします。太郎、ここにて護摩修し玉ふどへり、此れより3町ばかり去り、ある仙人がいつく所といふ尊薬師を安ず」とあり、その後、延暦二十三年（804）に入唐し、大同元年（806）に帰朝後、横峰寺の境内に杉を植え、高野山を拓き、真言宗を開宗した。空海が開いた真言密教の特長は山岳仏教的性格が挙げられる。それは入唐前の山岳修行にあると考えられる。土佐の室戸岬や石峰（石鎚山）などで厳しく修行に励んだと云われている。

極楽寺について

縁起えんぎによれば、今を去る1300年前、修験道の祖である役の行者神変大菩薩が関西第一の霊峰、伊予国石鎚山に入山（白鳳八年）龍王山に籠もられて衆生済度、密言浄土の実現を祈られつつ厳しい修行を続けられたところ、金色燦然と輝く御来迎を拝され「阿弥陀三尊」更に利益輪身として変化せられたところの石鎚蔵王大権現を感得されました。爾来役の行者が日々一刀三礼の誠をこめて、その御姿を霊木に彫み奉り行者衆の聖地龍王山に堂一字を建立し、阿弥

陀三尊と共に石鎚蔵王大権現の御尊像を奉祀せられ「修証験得の精神を旨とした山岳自然道場にせよ」と教示された。これが極楽寺の前進である天河寺である。

後に大同元年（806）空海が役の行者を慕って山野を踐渉し石鎚山中にて修行せられた事もあって、当山は山岳自然の修行道場であると共に古義真宗の教義を守り宗祖として弘法大師を大切にお祀りしている。

南北時代（1597）頃、天河寺が炎上の際に宥法大徳和尚が阿彌陀三尊奉持下山し、龍王山を仰拝出来る大保木の地に堂一字を建立、ご本尊のご本誓を体して「極楽寺」と名付け、天河寺より法灯をそのまま現在に継承している。

坂中寺について

黒瀬浦山の坂中寺は天河寺とも関係があると思われるが今は極楽寺の末寺で、本尊は千手観音（行基作）で古い立派な杉材の中に、古い仁王門があり、静寂な中に厳として存在し、新居浜市や東予市、その他の地方からも常に信者がお参りし、久野住職は高齢にもかかわらず御壮健で無欲で奉仕と人に喜んでもらうことのみを楽しみとしておられた。

この住職の人格に触れようとする事もあって、きんじょうきんざい近郷近在からの団体でお米や野菜など持参して修行を重ねるために泊まり込みでお参りをする者が後を断たない状態であった。久野住職は歳をとられてから後も書道の勉強に里まで通われる努力家であった。昭和五十二年八十九歳で逝去せいきよされ、現在は岡本龍澄住職がおられる。

旧天河寺跡は平坦で石鎚神社の所有地で立派な杉林があったが、昭和十九年頃、食糧増産の世論が高まり、時の新居郡翼賛会事務局長の故幾島照夫氏と故伊藤一氏が現地に登りアメリカ軍が上陸した時のゲリラの拠点としてもという話をしたことがあり、石鎚神社に行

き当時の武智盛一郎宮司に解放方をお願いしたこともあったと書かれてある。

戦後未墾地みこんちの解放をされ、龍王山地区に入植者が入り込んで開墾を行ったがその開墾中に家の礎石や瓦の破片等が発見され、規模の大きなお寺であったことが確認されたのである。天河寺の発見された瓦等の遺跡は、現在極楽寺に大切に保管されている。

(伊藤一氏著の黒瀬峠や極楽寺館長の神野龍光氏の話による)

サイノカケ地蔵

千野々の向かいの西の上に古い旧道(大保木道)の傍に「サイノカケ地蔵」さんがある。源氏に追われた平家の武士が洞穴に隠れて咳をしたので、捕まり殺された場所である。また、銀能義民の治兵の妻に負われた末子の林蔵がここまで来たとき、西条城の警吏に会い林蔵に蜜柑みかんを与え、蜜柑を食べている所を打首され、その切り口から蜜柑が出て来たと言う。その後、家に帰り放心の状態のまま姿を見せなかった。

民衆のために斃たおれた人々を追慕する心は永久に消滅しない。

村人の手で治兵堂を建て、庄屋に治兵の一族がきて、その霊を手厚くお世話をした。庄屋の実務的な仕事は細野の中西が担当した。治兵の妻も細野中西の出身ではないかと思う。庄屋の工藤トモが亡くなってからは、特に8月の盆踊り等のお世話は庄屋の跡を継いだ養子の伊藤一喜家と村人がしていた。

私が小学校3年生の頃に百日咳かに罹り、夕方暗くなって祖母に連れられてサイノカケ王子にお参りした。側の木の葉を取って胸のあたりを摩さすってもらったら咳が止まった体験がある。

神木の切り出し

山の恐ろしさを知り、山に入るときには、山の神に物を供え、神に無事を祈って、山の神を怒らせないように出掛けた。山道の側には、幾つもの山の神を祀った跡がある。そして、山の魔物が山を守り、山を豊かにしてきた。木々も自然の中に保護され、大きく成長してきたことが分かる。

このようにして育った巨木を豊臣秀吉公が京都市東山区茶屋町に方広寺の大仏殿の建立を計画した際、京都付近には、巨木が得難く、大仏殿の用材を伊予の石鎚山の前山から仏木の巨木の良材を伐り出された。この時に、福島正則は奉行として、諸大名に良材の供出を命じた。その用材は、高知県、宮崎県、和歌山県の熊野、長野県木曾、富士山から集めた。

伊予の石鎚山修験根本道場の仙徳寺（現在廃寺）の資料によると豊臣秀頼公が大仏殿の建立に際して用材を求めて石鎚山登山をして、仙徳寺当山の立木を見てまわった時に、樽の破損箇所の大修理を行ったと云う記録や大仏殿の用材は仏木の巨木の良材を伐り出された記録があり、現在、石鎚山系の林業に詳しい人の話を参考にして考えると場所は、横峰寺辺りではないかと私は推測している。

石鎚山前神寺の旧記によると、運搬にあたり、仏木が動かないので、福島正則が石鎚大権現に祈願のため、宿坊を建てて畿日か参籠したことが記されている。この宿を「屋形宿」と呼ばれたことが日記に記されている。

巨材を出すのに山は険しく、その上、神木だということでも福島正則は人夫の激励に努めたが、運び出すことは困難を極み、多くの死傷者を出した。人力だけでは、どうにもならず伐木の代償として、破壊していた常住社の神殿を造営するという願文を神前に捧げ、神力の加護によって、運材を完了した。

機械力もない古代、険阻な石鎚山中から、巨材を伐り出し暖媛県東伊予市の広江港で船や筏に積んで遠い京都まで、苦勞して、運んだ

と思う。そして、常住社の神殿を改築して、神恩に報いたことの資料が前神寺にある。

断層崖の險阻を越えて、用材を運搬したとすれば容易ではなく、長太の材を奥山から伐り出すには、積雪期を利用したと思う。そして、天正十四年（1586）に京都市区に方広寺の大仏殿の工事が始まり、建立された。

そのお堂（方広寺）は縦81m、横50m、高さ45mと云う。大きなもので、大仏の高さは19mあり、奈良の大仏よりも大きく、渋を塗り、金箔を置いて彩色された木彫の座像であったが慶長元年（1596）大地震に破壊し、同七年に炎上した。昭和四十八年も火災により、燃焼してしまった。現在は本堂、大黒天堂、大鐘楼を残すのみとなっている。数年前に方広寺を調査したが昔の面影はなかった。

道路の開設について

明治二十一年に市町村制が敷かれ、旧各村（藩時代の各村）内には、一校ずつ小学校が設立された。

その後、村の支出が殆ど教育費や人件費として占められたので村内の6校を統廃合して3校にすべきだと村の方針が出された。この方針に基づいて中野の釜之口から東之川に至る村道の開設の計画がされた。

明治四十五年神戸村から工事を始め、大正二年に黒瀬の向え付近まで、大正八年頃には大保木の極楽寺の下付近まで、大正十年には千野々まで延長された。

工事に携わった人は亡くなっていて工事の状況は現在分からないが、伊藤治男氏の話によると下駄屋のある所から駐在所のあった場所まで極楽寺の下間では勾配を考えて石積みをして大変だったと聞

いている。

県から補助を受けて、村道を開設した。その後、郡道にかわり、大正十四年には郡が廃止となり、県道となった。河口から西之川までは初めから県道で幅3・6mが開設された。そして、昭和二年に終点の西之川の大宮橋が完成した。

黒瀬峠を越えて氷見に通ずる道路には、西条二代目市長の高橋初次郎氏が若かりし頃に中心となって運動し、開設の運びになり、大正九年頃に道路工事が盛んに行われた。直接の目的は上流から加茂川を流して来た材木の丸太を大畑で陸揚げして荷馬車で氷見の製材工場に運んで製品にしたと聞いている。その後、氷見山道の付近には2〜3軒の製材工場があつてそこで製品にし、その製品を荷馬車で町場に運んだ。雨が降れば加茂川の水が増水し、その時に人夫14〜15名を集め大畑まで流し、木材を揚げて、木材や製品を荷馬車に積み氷見に下げたと聞いている。

その道路は林道として国庫補助を受けて、現在の道路を開設した。昭和二十年八月の敗戦までは、鉱石や木材を搬出するためにトラックや荷馬車を多く使用したが、敗戦と同時に鉱山が閉山になり、戦後は復興のためにトラックで木材を搬出する予定であつたが、昭和二十二年頃に伊藤一氏が村長になった時には兎之山を経て釜之口までは特に道幅が2・8mしかなく狭くてトラックは通れ無かったので荷馬車を一日二台通行せざるを得ない状態であつた。村長の就任後、急カーブの箇所や待避場所等の局部改良の願いをした。

その後、西条から兎之山廻りの西条行きバスの運行が出来るように調査を行い、昭和二十四年末に当時40万円の補助を貰い村と県とが協力して中野から黒瀬間の待避場所等の調査を行い、待避場所を造つた。

又、昭和四十五年頃に黒瀬ダムの建設によって県道が水没することになり、代替の道路として県道はダムの左岸に、市道はダムの右岸

に開設され、両方ともに全線に互り昭和四十九年頃に舗装が出来て道路が完成した。

林道の開設について

大保木村が反別割と言う特別税を徴収し

- ① 昭和2年に舟形から河口までの村道を開設された。
- ② 昭和2年に河口から西之川のおおみやばしまで開設された。
- ③ 昭和2年に西之川から東之川まで、荷車の通る林道が開設された。
- ④ 昭和2年に黒瀬土工森林組合しんりんくみあいによって浦山林道の開設に着工された。
黒瀬土工森林組合委員長 伊藤清一郎、会計 伊藤隆次、理事 伊藤喜惣衛、伊藤一男（村長）、伊藤作一、曾我彦蔵、中川弥吉、監事丹喜十郎、丹虎之丞、伊藤光次郎、高橋初次郎、万条牧太の各氏
- ⑤ 昭和4年に平野土工森林組合によって平野林道の開設に着工された。
平野土工森林組合委員長 伊藤文次、会計 伊藤周一、理事 伊藤沢一、伊藤秀信、堀池伝太郎、山本善太郎、住友林業(株)、曾我部軍一、監事 伊藤丑蔵、伊藤市太郎、森田鶴吉、曾我部牧太郎
- ⑥ 前田と今宮林道は相次いで昭和4年に開設された。

(黒瀬峠伊藤一著書による)

木材を伐採して林道に枕木を敷いて滑らし、木馬で県道まで運び出したり、又、策道さくどうで山から木材を県道の脇までおろしていたのを子

供の頃に見かけた。

村人との関係のあった家畜（牛、馬）頭数について

中奥山（今宮も含む）安永六年（1777）牛1頭、馬18頭

前大保木山 寛政九年（1794）馬26頭

嘉永4年（1851）馬18頭

黒瀬山（浦山も含む）寛政九年（1797）牛3頭、馬3頭

兔之山 文化十一年（1814）牛5頭、馬1頭

（黒瀬峠伊藤一氏著による）

大保木村の旧慣習について

「杉や松等の植材の目的でない下木や雑木、枯木の所有する山林内に立ち入り、植林のためにその木を伐採しても咎めない」と云う慣習があった。

そして、伐採した木を薪にした。また、伐採にした木の枝も貰って薪にした。

（慣習化されたルールを古老や母白石シゲルから聞く）

大保木村大字中奥山の各氏民の規約について

住人が平和に生活する為に最低守るべき「ルール」があった。

「当字民ハ将来ニ於イテ規約ニ反スル者ハ各字通ジテ雇イ入レヲナサザルノミナラズ、必ズ交際スベカラズ事、但シ、違約ヲナス時ハ其ノ者ニ於イテ必ズ責ヲ負フベキモノトス」と云う規約が大字中奥山にあった。この旧慣習は村人の共存（共生）共栄の為の人間の生活の知恵であったと思う。

（なお、この規約は現在の条例に当たるものであったが現在は存在していない。）

(大字中奥山村規約字連名綴による)

高橋 (太鼓橋)^{たいこぼし}

この橋は、鴉からすの川の少し下、梁瀬という処かかに架かる。旧は兎鳥の川に大石を並べ、飛石というものの如くにして、これを渡り来りたれども、出水の時、川留となり、数日隔てられける間、いつの頃よりか板橋を架く。

その橋落ちて後、天明年中、中奥山、東之川山言い合わせこの高橋を造る。西之川山よりも、その費の内少々を償う。この高橋も、天明より天保まで、凡およそ50余年の間、七度落つ。

この橋、長さ22間、下の水際迄、平水の時6間。両はし大石を積み重ね、大木の甚だ長きを梁とし、段々に組み指し出し大石を以てこれを押さえ、板を張る、その形そりて、太鼓橋というものの如し、揺れ動きて心地危めまいうく目眩めまい転して意迷うというものに似たり。甲州路に聞こえたる、猿橋の模様まように髪髭かみひげたり。近辺の山中第一の奇橋というべし。その形図せるが如し。(西条誌より参考)

写 真

なお、前頁の写真は、西条誌を参考に、場所を確認して複製したものである。中奥の山神の向かえの左岸の砂防工事のために川が昔と変わっている。

平成十二年十一月二十二日作成者白石史朗

大保木村の製材所について

県道が開通した昭和の始め頃までには加茂川にも現在と違って水量があったが雨が降れば、水量も増し人夫を約14を集めて、木材を一本ずつ流して黒瀬の大畑や釜の口の製材所迄流し、製品にして馬車や自動車で運んだ。途中で雨が止めば水量も下がり、次の雨が降り水位が上がるのを待った。

製材所は西条と氷見の別れ道の黒瀬の大畑の所に2〜3軒あった。そこで製品にして、馬車で氷見に運んだ。西条市釜の口の製材所での製品は車で西条に出した。県道が開通してからは千野々、中奥、前田、細野、今宮、西之川、東之川、千足からも便利になった。特に、戦後一時木材の需要が多くなり、伐採や植林製材、炭、薪の生産、運搬等の山仕事が増え、林業に従事して生計を立てる人も増えた。最初のころは荷馬車で、その後はトラックで西条や氷見に運び出した。

戦後、千野々や溜の神社の近くに製材所も出来た。木材の製品だけでなく、薪や炭を大保木村の奥地からも燃料として車で町に運び出すようになった。

大保木村の食生活について

古代には雑穀（麦、稗、粟、黍、蕎麦）や野菜の栽培も普及した。

野菜の煮炊き干川魚も焼いて食べた。一日の食事も2食が多かった。古墳時代には塩の精製もしていた。

中世になり、味噌作りも一般化して雑穀に沢庵などの漬物、味噌汁を食べていた。

近世になり、明治、大正、昭和の初期では、あまり中世の食生活と変わらなかったと思うが安土桃山時代になってトウモロコシや馬鈴薯^{ばれいしょ}、トマト、西洋野菜を栽培し、食べるようになっても、特にトマト等の独特の臭いに癖があった。この頃には砂糖も出来、テンブラも食べていた。

戦中や戦後は田舎に疎開して村の人口も増え、ますます食料事情が悪くなり栄養失調で脚気に罹り^{かか}、目だけがギョロギョロとしていた。

当時の主食は麦と薩摩芋^{さつまいも}、トウモロコシであった。麦も現在の押し麦でなく丸麦でプリプリとした硬いものであった。戦後少し経って押し麦になり食べやすくなった。戦後、外米の配給があったが日本人の口には合わなかった。

そして、一時農協ではトウモロコシの茎を絞って砂糖を作ったり、焼き畑農業で小豆や蕎麦^{そば}、粟^{あわ}、稗^{ひえ}、コキビを作ったりした。現在でも食料の非常時に供えて東之川には100年保存が出来る種を蔵の中に保管している。

工藤金太郎氏にも昭和三十年頃に稗や粟が俵^{たわら}に入れて保管されていましたので県立西条農業高等学校で発芽試験をしましたが発芽しなかった。

又、蕨^{わらび}の根や薯蕷芋^{ひかんぼな}、彼岸花の球根を水に晒して、団子にして落武者の先祖が飢えを凌いだ^{しの}ことを第二次大戦の後の、物の無い時に母親が一度だけ作って教えてくれたことがある。その時に、焼き畑に蕎麦や綿も植えて作った。そして、馬鈴薯を腐らして澱粉^{でんぷん}を取り出したことを教えてもらった記憶がある。

大保木の歴史

私の故里は、ふるさとの山に向かひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな（石川啄木）

ふるさとの山に向かうと万感胸に込み上げてきて何も言葉が出てこない。ふるさとの山はしみじみ有難いことである。啄木の和歌のとおり、時に訪ねると育った私達に力を与えてくれる。そして、修験道の昔からの道場として登った石鎚山がある。日本七霊山の一つで、標高1982mの西日本最高峰である。

千参百年前、修験道の祖である役の行者は、白鳳八年に石鎚山に入山し、龍王山に籠こもられ山林修行の道場として開いていった。

後に大同元年に空海が役の行者を慕したって山野を歩き石鎚山で修行された。石鎚山は長い間女人禁制であった。その頃、母親が女友達と一緒に成就じゆうじゆに荷物を置いて登山をした時に神（天狗）隠しに遭って荷物が無くなって困ったことがあったと聞いている。

旧参道は

小松↓氷見↓長谷↓黒瀬峠（茶店）↓里山↓極楽寺↓寒の崖↓から
すの川↓坪石↓治平堂↓淀↓竹屋敷↓細野↓河口↓今宮↓成就↓石
鎚山
↓坪石↓東浦↓前田↓東之川↓王子（首なし地蔵）↓黒川↓
千足↓西之川↓東之川↓瓶ヶ森

県道が開通されるまでは途中で宿を取り旧道を歩いて石鎚山に登った。旧道は、氷見から黒瀬峠までは緩やかな坂道で、黒瀬峠から極楽寺までは、ほぼ平坦な道で極楽寺以降は登ったり下がったり
の山道であった。当時中奥、千野々、細野、前田、今宮、西之川、

東之川、千足に不便であった。昔の宿屋としては淀（浜重）竹屋敷、中西、魚信^{うおのぶ}、河口、今宮、黒川、成就にあった。細野の中西の庭には信者が庭木の苗を植えて行った木が大きく成長している。

お山市は石鎚神社の夏の大祭で7月1日～10日の間数万人の信者が登拝し、その10日間は村人がお宿でパートとして働き地元民の現金収入の一部として、経済的に潤った。バス利用で、お宿の泊りも無く、以前のように活気に満ちた風情が無くなった。昔は道を歩いて登る信者で賑ったが、現在は観光バスで静かな山里も交通ラッシュである。今は大型バスで西之川まで行き、昭和四十三年に敷設されたロープウェイを利用して成就までは、楽に登れるようになった。日帰りも可能になった。昔は中奥の向かいの山の中腹にあるネブタギの赤い花が咲き、真夏に大豆の根元に土かきをする頃チリンチリンと鈴の音を響かせながら歩いてくる信者をよく見掛けた。私が小学校の上級生になった昭和二十四年頃には戦後の復興の兆^{きざ}しがみえはじめ、バスで河口まで行けるようになった。歩いて登る者はいなくなり、大型のロマンスカーも乗り入れるようになった。また、昭和二十三年頃の夏に坪石^{つぼいし}にキャンプに来て湧き水の出る所で米を研いた跡もあった。しだいに、石鎚山の登山だけでなく、キャンプも楽しむために山を訪れるようになり、現在、夏になれば川原にテントの花が咲いている。

中奥の中心は、昔は小学校のあった治平堂のあたりが中心であった。小学校が出来る前には、中奥の伊藤伝一氏と細野の東に寺小屋があった。特に、大正十四年に住友共電が発電所を千野々に作り、つり橋、鉄橋を架けた。その後、県道が西之川、東之川、千足まで開通してからは、だんだん千野々に中心が移り、人口も増え、生活必需品を買い求めることが出来る店も増え整ってきた。昭和二十七年三月高嶺^{たかね}小学校卒業者数をみると千野々に人口が集まり、生活文化の中心が移っていった。学校、郵便局、診療所、農協等の公共施

設も揃っていった。昭和三十年頃の大保木中学校卒業者をみても、高嶺小学校出身者が一番多く、大保木の中心が極楽寺辺りから千野々に移った。

昭和二十七年三月

高嶺小学校卒生

千野々 11名

中奥 7名

細野 4名

前田 3名

大保木 2名

今宮 2名

昔の旧道は山の中腹にあり、旧道沿いには茅葺かやぶきの大きな家が今も残っているが、県道沿いの家は、トタン屋根の家が多く。県道が通り、発電所も出来て開けていったのが千野々集落である。大保木村には兎の山、黒瀬、浦山、大保木、千野々、前田、中奥、野細、今宮、西之川、東之川の村があった。兎の山、黒瀬を除いて耕地面積も少なく林業を中心にした村であった。現在、前田、今宮、東の川は廃村になり黒瀬はダムのため一部を除いて廃村になっている。

中奥より奥の村は大保木に行くのに一度加茂川を渡らなければ産物を町に出せず、換金も出来なかった。また、米は殆どほとんとれず木材を筏いかだで流したり、なかもちで換金して生計を立てていた。年貢も金納しか方法が無かった。そこで中奥の庄屋工藤治平は伊豫西条藩に金納の直訴に行く。途中千野々の塞の崖の所で西条藩役人がミカンを子供に与え、その首を跳ね、子供の首にはミカンが残っていたと聞いている。子供は偉い人の子で殺さないように命令が出たが既に遅かった。大保木村の何人かの庄屋の中でも中奥の庄屋は、村民の

ために命を捨てて尽くした立派な人であった。

現在も千野々鉄橋の上にある塞の崖の所に霊を慰めるためお堂を建てお祀りしている。寒い冬の夕暮れであったと思うが、百日咳になった私を祖母が連れてお地藏さんの側そばに生えている木の葉を取って首や胸の周りまわりをなでると、咳が止まり楽になった経験がある。偉大な庄屋治平の霊を何時までも慰めるために、村人は治平堂を建立して毎年旧盆には盛大に盆踊を行なっている。歌やテンテコテンテコと太鼓を叩きながら踊る、伝統的な盆踊である。極楽寺でのお涅槃ねはんのときにも、住民の手で銀納義民の芝居を演じて、後世に伝えながら霊を慰めている。

中奥の庄屋は、お家断絶に近く事務能力の低下により、代わって細野の中西の曾我部家が庄屋を継ぐ。一部昭和五十年頃に改築されたが、現在も馬屋や屋敷やしきろう牢が残っている大きな屋敷である。庭には大きな櫨かしの木があり、灰汁あく抜きした実を貰って食べたことがある。

秋にはとうきびを稲木いなぎや軒下にかけて陰干しをし、乾燥したものを豆だけ取り出し、石臼で引き割り、干した実の粗挽きを挽き割りと言う。挽き割りは、米と混ぜてとうきび飯にすると見た目には見事な黄色に炊き上がるが、口の中がぼそぼそして食べ辛い。細かく粉にしたハナゴは団子、餅、オツリ（コーンスープ）にした。山間部には田が無く米が採れず、麦ととうきびが主食であった。栄養補給のために、戦後昭和二十三年頃から小学校で脱脂粉乳の給食があった。食器はアルミの椀わんであった。

夏には加茂川の淵の底に、ぬか味噌を入れたビンを置き、その中に臭いを求めて入ったハヤが外に出られない仕掛けになっていた。いったいになれば引き上げて、ハヤを捕った。そして、5月頃にキャベツにつく青虫をえさに釣りをするとよくハヤが取れた。また、夕方川の淀んだ所に、みみずを付けた釣り針をつけておき、朝早く上げてウナギを取ったりした。取れたウナギはぬるぬるし、糸に絡み

ついで外すのが大変であった。当時ウナギや猪は動物タンパク源であった。そして、猪を飼っている家もあった。

五月の麦刈りには、どの家庭でも農協で旬のサワラを注文して買い、煮たり、炊いたり、焼いたり、酢漬けにして美味しく食べた。畑で取れたえんどう豆や、空豆と一緒に料理して食べた。昭和二十五年頃に中村の田にイナゴの大群が押し寄せてきた。それを取って食べた。茄子やキュウリ、ノビルに味噌をつけて食べると非常に美味しかった。筍たけのこシーズンのときにはおやつ代りによく食べた。麦刈りの頃ピンクに色づいた、酸っぱいのぐみの実や秋の霜が降りる頃赤くなり、甘味が増したまるなぐみ（シャシャブ）をよく食べた。

戦後の物の不足している時には、薩摩芋のつるや毒である日岸花ひがんばなの根を晒さらして、澱粉でんぷんを取り出し団子にして食べた。またじゃが芋から澱粉を取り出し乾燥させて熱い湯をかけて片栗粉かたくりこと同じようにして食べた。

戦時中には母親に連れられて半日かかって少しの米や塩、マッチ等の食料品や日用品の配給を何時間も並んで待つて購入して帰った。戦後、昭和二十二、二十三年頃、誰かが川に山しよの根の汁を流して川上から魚が浮いて流れているのを聞きつけて取って食べたことがあった。その後は、毒で魚が浮いている場合があるので取って食べなかった。子供の頃に全山が紅葉してくる頃、淀よどの向いむかいの山で椎しいの実を袋いっぱい拾って食べた。

昭和二十七年頃工藤宮太郎氏の寄贈による学有林に小学校はPTA中心になり、中学校は生徒が中心になり学校行事として、2日間上級生や下級生と一緒に班編成をし、植林や下刈したかりをした。戦後千野々から坪石の間を桜並木にするために、川沿いに桜の苗木を植えられたが、手入れをしなかったので成長をしなかった。当時、山林の伐採した杉や桧の枝を薪にして燃料にした。向いの山から束ねた薪を

背負って、家の周りの軒下や薪小屋に保管してかまどや風呂の燃料にした。山は枯れ木や枝を薪にし、きれいに清掃されて風通し妙よくなり、赤松林には松茸も取れた。細野の山奥にも松茸まつたけがよく取れた場所があったそうだ。

昭和二十三年までは、各家庭で藁わらを叩いて柔らかくして作った藁草履わらぞうりとシュローの鼻緒で作った下駄を履いていた。昭和二十四年頃になるとゴム草履や運動靴になった。戦後まもなくゴム長の配給があつても一日も持たないで裏が破れて水が入った。当時、高嶺たかね小学校では、雪の日でも毎朝、運動場で全校朝礼があつた。その後で、運動場を何周も駆け足をしてから教室に入った。寒さで足が凍えて感覚がなくなり、滑ったり、転んだりした児童もいた。

冬には、運動場にも霜柱が立ち昼頃には、溶けてべとつき、歩けば土が跳ね上って困った。草履ぞうりよりも下駄げたの方が多かった。衣類も従兄弟いとこの古着を貰って破れた所に継ぎ接ぎはをして着たが、栄養が悪かったので、どの子供も2本の青鼻を垂らして服の袖でよく拭き、てかてかと光らしていた。

任生川一帯は昔から石鎚山のふもとの山肌やまはだに、一面ミツマタやコウゾを育てて、それを原料にして高級な和紙である奉書紙が現在も作られている。任生川の国安の奉書紙は浮世絵にも使われた全国的に有名な伝統的な和紙である。

大保木村でも木材に比べて成長が早く、換金しやすいミツマタやコウゾの樹を育て樹の皮をとって和紙の原料として出荷した。中奥の曾我部ツヤ子氏はカンジャ谷でミツマタやコウゾの樹を育て、大きな釜で蒸し樹の皮をとって乾燥している作業を子供の頃に見たことがある。皮をとったミツマタやコウゾの樹は軽く、それを使ってその木切れを棒で叩いて遠くまで飛ばすカチカチという遊びをしたことがある。また、杖にもしたり、残りは薪にした。ミツマタの花は可愛い毛糸の感触のする黄色花で、独特の臭いがして、子供頃の

臭いが脳裏に残っている。

村の名の如く、杉や桧等の木材の産地で、県道が出来る前には旧道を通って、木材やミツマタ、コウゾの樹の皮を西之川や細野からは、一日一往復、大保木からは二往復の氷見までのなかもちをして現金収入を得ていた。細野の十亀恒吉氏の話では、荷物を背負って朝早く家を出て大保木の里山に着けばもう氷見も近づき後は楽だという気持を、里にやつと来たと言って喜んでいたそうだ。その後、道路も開通して物の運搬も人力から車に変わっていった。戦中、戦後の数年間は木材を運搬する荷馬車を見掛けた。戦後の一時期、木炭車のバスやトラックが走っていたが木炭車は火力が弱くて、バスが坂道に差し掛かると乗客が降りてバスを押し上げることもあった。小学校への登校途中に千野々で木炭車の炭に手動で風を送り、炭をおこしている風景をよく見掛けた。その後、木炭車の姿を見なくなり現在のバスやトラックになった。当時、よく見掛けたのは日通のトラックが多かった。山から索道で道路脇に木材を下ろし、荷積みをして運搬した。一部は地元で製材して運搬した。昭和二十七年の石油コンロがでてくるまでは家庭の燃料として木炭や薪も町に運搬した。

借金を金で払えず立木の山で返済したので、金持ちはますます山持ちになっていった。県道が開通し木材の運搬が可能になると、産家になって町に出て移り住むようになつた。また、戦後木材の需要も多く一時栄えたが、がいざい外材に押され山仕事も少なくなり、昭和二十七年頃から山の家屋敷を売って町に出ていく者が出始めた。現在は過疎が進み老人だけになってきた。7校の小学校の内、分校を含め一部平成16年の台風の被害のため全校が廃校になった。

戦後食べ物を求めて疎開して来て、山の人口も増えたが当時は山も食料事情は悪かった。町から小豆や芋と着物や帯、反物との物々交換にやって来る人も多かった。昭和二十七、二十八年頃は住友共

電の細野ダムと兎の山発電所の建設工事で労務者が増え、山の人口も一時増加した。特に、淀や千野々には店も出来賑やかになった。桑名には、パチンコ屋までも出来た。淀には工事で出きた土を埋め立てて現在の広場が出来た。千野々では、その土を使って校地が整理され、高嶺小学校が中学校から同じ敷地に分離移転をして独立した。現在その小学校も廃校になり、小学校の跡地はふるさと村の施設となっている。

昭和二十六、二十七年頃、庭石ブームになり、加茂川の青石を取る業者も出てきた。数年間続いたが建設省の監視が厳しくなり、石を取る事が出来なくなった。

昭和二十八年、細野にダムが出来てから、下流の水のすくなく、下流の川底の石も浮き彫りに成り、我々が育った時の自然も破壊された。昔の様に水がいっぱい流れている綺麗な加茂川が懐かしい。娯楽としては、戦後昭和二十三年頃、祖母が毎年6月に麦刈りが終わった農閑期に、山の人々と一緒に今治市桜井にある石風呂に行き、疲れを癒した。お土産に、水蜜桃すいみつとうやパイナップルの缶詰を買ってきてくれるのが楽しみであった。

石風呂は、天和元年（1681）南明禅師が浴した記録がある。岩穴を繰り抜き中でシダを焚き海水に浸り、濡れたむしろを敷き、水蒸気に身体を浴した。歴史のある石風呂である。

戦後少し経済的に落ち着いて来た頃に、田舎回りの芝居じょうりや浄瑠璃じょうりゆ、浪曲なみきょく、活動写真、映画を小学校の校庭で見た。昭和三十年頃中学校の芸術鑑賞会で漫才や映画、奇術（電球を飲み込んだり胃の中で電氣をつけたり消したりする芸）を見た。千野々で催し物があれば必ず有線放送で流し知らせた。そのときよく美空ひばりの歌や三橋美智也の歌（夕焼けとんぼ）、春日八郎の歌が山合いの谷間に流れた。千野々の発電所で流していたが、大保木の支所で流すようになった。昔いつごろか分からないが、中学校の下や坪石に隔離病舎があった。

特に中学校の下の隔離病舎には昭和五十年過ぎまで幽霊屋敷のような施設が残っていた。野球のボールが落ちて拾いに行くのが気持ちが悪かった。全国に伝染病が流行した名残である。

怖い話では、犬が入ったら出てこない洞穴が淀にはあると聞いているが、どこにあるのかわからない。なが淵には洞穴があり人が野宿をしたりしていたことがある。中奥の山奥の雪の上に一本足の大きな足跡があったという話も聞いたことがある。

村の施設

村役場

極楽寺の下にできた。昭和二十六年十月五日大保木村役場新築落成。大保木村が西条市に合併のため昭和三十一年九月二十八日に大保木支所になり、その後高嶺小学校の跡地に移転した。

駐在所

極楽寺下に

郵便局

千野々の川沿いにできた。その後道路の上に移転した。

診療所

大保木の極楽寺の横にできたが、昭和十年に千野々に移転した。助産婦の藤井氏も常駐して戦中、戦後の医者不在の時期には、子供を取り上げるだけでなく村民の健康管理に努められた。

歯医者

診療所の下川の川沿いに出張して来て治療をしていた。

農協

千野々支所、大保木支所、黒瀬支所があった。一時お茶工場もやっていた。

四国電力

大保木村役場横に出来、電球の販売をしていた。
学校

尋常高等小学校を明治に創立、戦後学制改革により千野々に移転して大保木中学校と改称した。東之川小学校は明治に創立、昭和に高宮小学校と合併した。高宮小学校は明治に創立、昭和六十三年に廃校。西之川小学校は明治に創立、昭和五十五年に廃校。今宮小学校は明治四十四年に創立、昭和四十七年に廃校。高嶺小学校は明治十年に創立、昭和十七年に千野々に移転して昭和六十一年に廃校、大保木小学校は明治十年に創立、昭和六十年に廃校。黒瀬小学校は明治十年に創立、ダム建設のため廃村により昭和に廃校。浦山小学校は明治に創立、現在に至る。兎の山小学校は明治に創立。昭和二十六年頃から住人が町に出ていき年々過疎が進み、小中学校も浦山小学校を残して他は廃校になった。村には高齢化が進み、若者がいなくなっている。

珠算塾

昭和二十三、二十四年頃に一時診療所下にあった。小中学生が習っていた。

発電所

大正十四年に千野々に住友共電の発電所ができて村民も働きに行っていたが機械化が進み、社員も少人数になっていった。現在は無人である。

職人

樽屋

中奥の上冠者でやっていた。工藤宗一氏（樽屋）

宮大工

村には何人かの宮大工がいた。

鍛冶屋

大保木と千野々に昭和九年頃から昭和三十二年頃までであった。

木挽き

製材機が出来るまで、山で大きな独特の鋸で木材を挽いて柱や板にした。

下駄屋

現在も下駄屋という地名が大保木に残っている。

自在鉤

各家庭の囲炉裏に掛けられていたが現在はお茶道具になってい

茅葺

村人が協力して葺き替えた。これも伝統と技術が必要である。現在はトタン屋根が多い。

おくど（かまど）

一家に一つは台所にあつて、鍋や釜をのせて煮炊きをした。徒弟制度は資源は枯渇しないが、需要が少なくなれば仕事も少なくなり技術も落ちる。仕事が技や人を研ぐ。

道具

農具

唐箕（穀物の実と籾殻を吹き分ける）殻竿（豆類や穀類などを打つてその実やもみをとる）足踏み脱穀、ケンドウ、三つ鍬、鍬類、腰籠、足臼（足で踏んで麦や米をつく）ケヤキの臼（餅や味噌、コンニャクづくりに使う）米びつ（トタン）セイロウ、モロブタ、大工道具、木挽き鋸、オイコ、カンジキ、藁靴草履、蓑、

産業

林業

植林、下刈り、枝落し（落した枝を薪にした）、間伐、伐採（間切り）、索道（山から木を降ろす）、木馬引き（木馬を使って木を降ろす）、炭焼き、薪作り、荷馬車、トラックの運転（木材運搬）、製材（製材所は千野々の宮下と古長河内神社の西隣に、昭和二十三年（二十五年頃にあった。）薪―石油―プロパンガスへと変った。そして薪を取らないので山は荒れている。

農作業、

10月末に麦や小麦まき

1月末麦や小麦踏みと追い肥

3月にジャガイモの種芋植えと薩摩芋のつる出しの温床作りおんしよう

5月に麦や小麦の収穫と薩摩芋のつる植え、ジャガイモの追

い肥、キュウリとナス、ウリ、かぼちやの苗植え

6月末にジャガイモの収穫をし、陰干して納屋に保存

7月大豆や小豆を蒔く、中奥のネブタ木の赤い花が咲く頃に大豆の根元に土かきをした。また焼畑で小豆やソバをつくった。子供も働き手の一人として子守や畑仕事を手伝い、おしんのような生活状態であった。

10月末に薩摩芋の収穫し、床下に保存し、他にキャベツを春に植え、大根は種を春と秋に蒔き、そして、晩秋にエンドウ、ソラマメの種を蒔き、玉葱たまねぎの苗を植えた。5月にお茶の新芽を摘み、蒸してむしろの上で揉んで新茶を作った。今と違って農作業や収穫によって四季の移り変わりを感じた。

公務員と会社員

郵便局、農協、村役場、学校、森林組合、発電所、四国電力瀬戸内バスなどに勤めている人もいた。

商店

(雑貨店) たかたや、岡田商店、農協(一時お茶製造や精米もしていた) 戦後、農協に米ドロボウが入り、川沿いに逃げたこともあった。

(医療関係) 診療所(戦後に星加医師、戦前戦後藤井助産婦が常駐して、村民の健康管理に当たった。)

魚屋(鍛冶屋の前で一時やっていた)

(呉服屋洋服仕立て) ミシン屋(千野々に秋山氏、淀に曾我部氏、昭和二十六年頃) 細野に藤田氏(戦後)があった。

駄菓子屋は千野々に2〜3軒あった。

パン屋は中奥の豆腐屋で製造販売をやっていた。1軒あった。

行商 何でも屋で戦後、今治からいりこや塩サバ、本など頼むと背負って回って来た。

富山の薬売り 1年に1回まわって薬を置いて行った。

お山市(10日間)

店(氷、食事の店) 桑名、淀、魚信、河口、今宮、黒川にあった。

お宿昔は淀、竹屋敷、新屋の下、中西、河口、今宮、黒川にあり、旧道筋は信者で賑った。住民は10日間お宿のパートとして働いた。戦後、バスの利用によって、途中での宿泊は無くなり、日帰りの信者が多くなった。

床屋 千野々に2軒あった。(仙徳寺前と高田屋西川向う)

新聞店 1軒あった。(伊藤氏)

村祭りや行事

旧正月 昔は新正月はせずに旧正月で祝っていた。雑煮は丸いあん餅を入れた。

節分 深深と冷え込む時季にたらの木にイワシの頭を付け鬼門の方角の壁土に突き刺し、福は内鬼は外と言いながら妙った大豆を撒いた。

おねはん会 釈迦が入滅した2月15日に行う。極楽寺には、10年に一度回ってくる。

桃の花の節句 桃の花を飾った。

端午の節句 鯉登り飾り、餅米を農協で粉にしてきて柏餅かしわもちをつくってもらって食べた。

盆 月遅れの8月13日14日15日16日

昔、子供相撲は8月15日に千野々の板東家の庭で行われた。中奥の盆踊は8月16日に治平堂で行い。夜店も出てなしを売っていた。盆踊は治平さんの霊を慰めるために太鼓をてんでこてんてこと叩きながら踊った。現在は千野々のふる里村でも踊っている。初盆の家にはせがきを立てている。

お月見 薩摩芋とすすきを供えた。暗闇の中の月は都会と違って美しい。星も綺麗きれいだ。

秋祭 10月15日、16日、千野々には獅子舞があったが、中奥には金が無かったのか古長河内神社には獅子舞は無かった。

運動会 10月16日に高嶺小学校と大保木中学校の合同で運動会が行なわれた。地域住民は年に一度の娯楽として、全員が弁当を作り一日を楽しんだ。この運動会が終れば霜が下りお、急に寒さが増し、唐芋からいもの取り入れがあちこちの畑で行なわれ、焚火たきびをしながら麦撒きの準備を行なった。

連合運動会 大保木村挙げての小学校校区別の対抗運動会があった。現在も旧村民が千野々のふる里村に集い行っている。

文化祭 営農の奨励のために地区毎の農作物の品評会を行なった。

黒瀬出身の彫刻家の伊藤百亀氏の作品も展示された。中学校でバザーがありうどんを食べたことがある。稲の刈り入れの頃に、高嶺小学校の児童が黒瀬で秋の紅葉と冬を向かえる農作業の風景の写生大会があった。その時に伊藤百亀氏の指導を受けた。芝居 秋に細野の春男氏の家で夕方芝居をやっているのを見にいつて、母親の実家に泊まったことがある。

村の食生活

豆腐 正月や祭りの時に各家庭でつくった。固くて甘みのある田舎豆腐であった。

田舎味噌 冬場に大豆を煮て、白うすでつきこうじと塩を混ぜ合わせて醗酵させる。

味噌漬け 悪い味噌に乾燥させた大根やウリ、九年母等を漬け込む。九年母はミカン科の常緑低木、夏に香の高い白い花が咲き、実みは甘みがある。あまり見たことがない。

醤油 大豆から作る。色は土色であった。

ひしお 各家庭で作りが違い、味も異なった。

コンニャク コンニャク玉を茹でて、白せつかいえきでつき、石灰液を混ぜ、煮て固める。コンニャク玉を屋根裏に保存して必要な時に出して作った。時々屋根裏で花が咲きその花は気持の悪いグロテスクな花であった。

ラッキョ 5月頃に玉をよく洗い塩漬けしてから酢を入れて作る。

梅干し 5月頃に梅を取りシソウの葉を入れて漬ける。

挽ひき割りご飯（トウキビご飯） 稲木で干したトウモロコシを、粗挽きした細かいヒキワリと米をまぜて炊きあげると、みごとな黄色になるがボソボソして食べ辛い。

おつり 秋口にトウキビを稲木に掛けて陰干しをし、乾燥したものを石臼で挽き割り粉にして煮つめたもの。

トウキビ団子

トウキビ餅

田舎団子 小麦を石臼で挽いて粉にして作る。

団子 農協で餅米を挽いて粉にして作る。

はったい粉 米と麦を妙いつて挽ひいた粉。

餅 旧正月につく。切り餅、あん餅、豆餅（大豆）、よもぎ餅、粟餅あわ、こきび餅、お雑煮には丸いあん餅（塩あん、砂糖あん）を入れる。

ソバ団子汁 ソバを石臼で挽いて粉にして作る。

きな粉 大豆を妙いつて石臼で挽いて作る。

ぼたもち お彼岸に作って仏壇に供える。

ばら寿司 ウズラ豆を具の中に入れる。甘みがあつてうまい。

妙り大豆に砂糖をかけておかずにした。

かんころ 薩摩芋を蒸して干して作る。白く粉がふく。

ようかん、芋飴いもあめ、ぜんざい、干柿ほしがき、アダコ柿の渋抜き（風呂釜で一

晩入れて渋を抜いた。運動会にも持っていった。）

水団子みずだんご 小麦粉に水を加えて団子状にしたものを実にした汁。

作物

穀類 麦、小麦、粟、コキビ、トウモロコシ、小豆や大豆、ささげを焼き畑農業で小豆やソバをつくった。

野菜 コンニャク、胡麻ごま、大根、人参、ジャガイモ、ゴボウ、カボチャ、薩摩芋、キュリ、ウリ、トマト、茄子なす、レンコン、クワイモ、タイモ、白菜、葱、玉葱、ワケギ、シソ、ラッキョ、キャベツ、コンニャク

山菜 タケノコ、ウド、タラの芽、イタドリ、ワラビ、ユリ根、ノビル（焼いて味噌をつけて食べる）

香辛料 柚、梅、山しょう、
果実 ナツメ、甘柿、蜜柑、すもも、ゆうこう、栗、びわ、ユス
ラウメ、山柿、シャシャブ、無花果、アタゴ柿、西条柿、金柑、禮
ニツケ、梨、グミ

野生果実 あけび、野いちご、カヤの実、ぎんなん、榎の実、椎
の実、山葡萄、

花 石南花、山つつじ、ネブタキの花、百日紅、八重桜、山桜、
ムクゲの花、棕の木（羽子板の羽つきに使い、実の皮は戦後石鹼の
代用品になった。）

野草 白蚩袋、アザミ、山ゆり、ささゆり、

草花 出世花、ホウセンカ、菊、ダリヤ、しゃくやく、牡丹、サ
フラン（薬草）

大木 榎の大木が東浦にあった。桜の大木は小松の人が9才の時
大保木小学校に植えたそうです。樹齢約100年かやの木の大木は
細野の庄屋にある。銀杏の大木は中奥の治平堂にある。八重樫の大
木は中奥の庄屋の庭にある。大保木峰かみじの庭に大木がある。古
長河内神社には330年杉の大木がある。

動物

家畜 兎、鶏、豚、牛（1年間預かって育てる。）山羊（昭和
二十四年頃に乳を搾って飲んだ。）犬（獵犬）、猫、アヒル、祭りに
は鳥肉をよく食べた。

その他の動物 狸、猪、狐、イタチ、小鳥（目白、やまから）キジ、
ヒヨドリ、ツバメ（各家庭の軒下に巣を作る。それを青だいしょう
がよく狙う。）マムシ、青だいしょう、雨ガエル、ガマガエル、トカゲ、
イモリ、ムカデ、サンショウウ魚（前田、大保木の清流）黒蛇、アユ、
ハヤ、ウナギ、大山トンボ、赤トンボ

山の歴史の一部だけです。私が体験し、母親や祖母、古老に聞いたことを書き綴ったものです。現在、多くの方のご協力を得て資料を収集しています。ご意見がありましたらご連絡下さい。

文責 白石史郎

大保木村と石鎚山麓の歴史と資料

大保木村の歴史

2007年7月10日

著者

白石 史郎

発行者

十亀 建広

発行所 大同美術印刷株式会社

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 2-19

TEL 03-3254-8131

FAX 03-3254-8133

URL <http://www.daido-net.com>